

近世日本社会におけるフラスコ形ワインボトル 流通状況についての再検討

鬼東 芽依

1 本稿の目的と課題

1-1. 本稿の目的と分析対象

江戸時代、幕府は長崎・薩摩・対馬・松前のいわゆる「四つの口」で海外と交易を行っていた。その一つである長崎は、唯一ヨーロッパに開かれた口であった。17世紀の出島には毎年平均5～6艘のオランダ船が入港しており、主に生糸や織物を輸入し、銀・金・銅や陶磁器を輸出していた。本貿易による取引のみならず、脇荷貿易とよばれる個人間での取引や、商館員と日本人の交流によって様々なオランダの文物が江戸時代の日本にもたらされ、受容されていった（川口 2007、山口 2008、長崎市史編さん委員会編 2012）。

出島は1922（大正11）年に国の史跡に指定され、

現在は「出島和蘭商館跡」という史跡である。1951（昭和26）年から公有化に取り組み、1996（平成8）年から本格的な発掘調査が行われた。発掘調査では、当時の建物遺構が検出され、商館員たちの生活に関係した遺物が出土している。その中でもとりわけ多く出土するのがワインボトルである。半球形のワインボトルが主体で（図1・2、川口 2007：52頁）、その特徴的な形状からイギリスなどでは「Onion shaped bottle（タマネギ形ボトル）」、オランダでは「kattenkop（猫頭）」などと呼ばれ、日本国内では「フラスコ形」（山口・田中編 2018b：5頁、山口ほか編 2019：109頁）と呼ばれる（註1）。フラスコ形ワインボトルは、イギリスの廷臣であったケネムル・ディグビー（Kenelm Digby）によって1632年ごろに開発されたといわれている。



図1 出島和蘭商館跡出土フラスコ型ワインボトル（山口・田中編 2018b：7頁、写真1）



図2 オランダ・アムステルダム市内の発掘調査で出土したフラスコ型ワインボトル（Gawronski 2018：p. 271）

胴部を球形状にし、底面をくぼませることによって、従来の瓶よりも安定性を向上させた。また、口部にガラス栓やコルクを縛るための紐を固定するための「string rim」とよばれる鑿のような凸帯をつけた (Clarke 2015: p. 692)。1740年代には、現在のワインボトルのような細長い形状のものが主流となったとされる (前掲同: p. 823) ため、フラスコ形ワインボトルが舶載され日本に持ち込まれたのは17世紀後半～18世紀前半ごろと考えられる。

オランダから持ち込まれたワインを含む「南蛮酒」は「上流支配階級の贈答品の花形」(間庭 1976: 94頁) で、贈答品としてオランダ商館長から長崎奉行などに贈られている (前掲同: 100頁) ことや、1650 (慶安3) 年にオランダ商館長から徳川家綱へ献上された (前掲同: 108頁) ことなどが知られている。ワインボトルは中身が飲み干されると廃棄されたとされるが、ワインボトルを含む酒瓶は、再利用もしくは容器自体が貴重な舶来品として国内に流通していたことも考えられる (扇浦 2002: 98～99頁)。流通については以下のような話が存在する。

- ①長崎に滞在していたオランダ東インド会社の乗組員たちが海へ投げ捨てた酒瓶を、長崎市中の人々が拾い、高値で売っていた (由水 1983: 164頁)。
- ②海に捨てられた空瓶を「水夫が潜って回収」したり、「出島出入りの役人」が「駄賃代わりに空瓶を要求」したりしていた (扇浦 2002: 98～99頁)。
- ③拾った瓶を「綿に包み、桐箱に収め」、「江戸や大坂の知り合い・親戚に贈った」 (山本 1990: 249頁)。

これらの話を裏付けるように、ワインボトルは出島和蘭商館跡の敷地内のみならず、長崎市中や江戸府内の国内近世遺跡からも出土している。

以上の点を踏まえ、ワインボトルは近世の日蘭交流を考古学的に検討するうえで重要な遺物の一つであると考えた。そのため本稿では、国内近世遺跡か

ら出土した日蘭交流関連遺物のなかでもフラスコ形ワインボトルを主な対象とする。以前の研究 (鬼東 2021) を踏まえながら、文献や絵画などの史料と国内伝世品などを紹介し、フラスコ形ワインボトルの国内流通状況を再検討したい。

なお、フラスコ形ワインボトルの各部位の名称については、山本孝造の研究 (山本 1990: 333頁) や Indrė Šimkutė (2011: p. 158, Fig. 5) による研究、各報告書内の記述などを参考に図3のとおりとする。

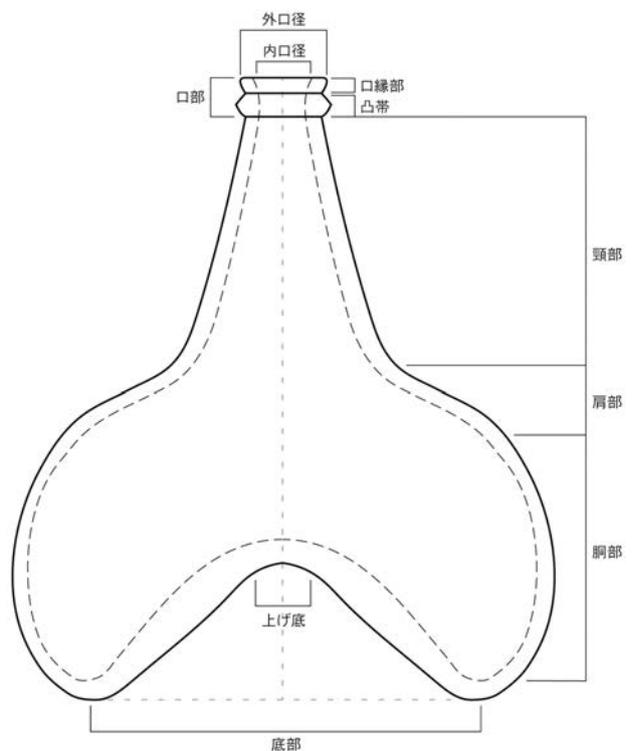


図3 フラスコ形ワインボトル各部位の名称

1-2. フラスコ形ワインボトルの研究状況と課題

ワインボトルは、国内近世遺跡から出土する舶来のガラス製品の一つとして取り上げられ、以下の研究に代表されるように、主に出島に滞在していた商館員たちの生活文化の様相を表すものとして扱われてきた。また、長崎市内における舶来ガラス製品の流通や西洋の食文化の受容という点でも扱われた。国内近世遺跡から出土するオランダ貿易遺物の概要報告のなかで、永松実 (1993)、扇浦正義 (2002)、川口洋平 (2007)、小林克 (2001、2021) などがワインボトルを取り上げている。

永松実（1993）は「発掘された食文化の洋風化について」というテーマのなかでワインボトルを取り上げている。万才町遺跡（長崎県長崎市万才町・町年寄高嶋宅跡）の出土例を取り上げ、同様のワインボトルについて大槻玄沢が『蘭説弁惑』のなかで言及していること、司馬江漢が長崎でワインボトルを購入した記録があることなどを指摘し、国内に伝世品があることも紹介している（永松 1993：147頁）。永松の研究は、長崎市内の報告例と同時代の資史料や伝世品を併せて分析し、食文化の洋風化について論じている点で重要である。

扇浦は、出島和蘭商館跡と長崎市中から出土するオランダ貿易遺物の一つとしてガラス製品を取り上げ、「イギリス製の脚付グラスやオランダ製のボトルに大別できる」（扇浦 2002：98頁）とした。その中でも大量に出土するワインボトルとジンボトルを取り上げ、空瓶の流通について触れ、ワインボトルやジンボトルが「大切に保管されていた」（前掲同：99頁）と指摘している。

川口は、発掘調査にて出土するオランダ商館ならではの遺物としてボトル・ガラス坏類を紹介している。そのなかでもボトルについては「半球形のワインボトルが主体」とであると指摘している（川口 2007：52頁）。

小林は、日蘭物質文化の比較研究において、ワインボトルやジンボトルが江戸遺跡から出土していることに触れ、「江戸では色々な酒が楽しまれていたようである」（小林 2021：234頁）と、江戸における西洋飲酒文化の受容を示唆している。

岡泰正は、長崎市教育委員会が発行した出島和蘭商館跡の報告書において、出土遺物のなかからガラス製品を取り上げ報告している（岡 2008・2018・2019a・2019b）が、そのなかにワインボトルも含まれている。

2008年の報告では、カピタン部屋・拝礼筆者蘭人部屋・乙名部屋・三番蔵出土のガラス資料を紹介している。「出島のガラス資料の大部分がワイン、ジンを主とするガラス製の酒瓶で」（岡 2008：43頁）、出土したガラス瓶片からシール（seal）（註2）が

見出されたことを指摘し、シールの内容から、出島においてボルドー産のワインが飲まれていたことを報告している。

2018年の報告においては、ワインボトルの器形について「ボーフラスコ（先細りの頸部を持ち、下部が半球体で上げ底）」「現在のワイン瓶と同形の丸瓶」（岡 2018：78頁）と2種に分類している。また2001年に報告済みのオランダ製ガラスボトルについて、その瓶のシールに「RYKS EIGENDOM（ライクス・エイゲンダム）」と書かれていることを言及し、これが「国の所有品という意味である」ことや「ワイン瓶は国のもので、瓶を返さなければ瓶の保証金も返却されなかったという当時の事情を推察させる」ことを指摘している（前掲同：79頁）。

2019年の報告では、長崎市中である江戸町（岡 2019a）と江戸町側護岸石垣（岡 2019b）から出土したガラス製品についてそれぞれ報告している。江戸町においてワインボトルやジンボトルなどの酒瓶やカットガラス坏、イギリス製のガラス皿などが出土したことに触れ、出島の範囲外である江戸町の生活が「西洋器物を取り入れた洋風のものであった」ことを指摘している（岡 2019a）。また、ワインボトルについて、「東インド会社の船が訪れたいたる所で発見される」ことや「暗緑色のボトル」が「ドイツかオランダで作られていた」ことを指摘している（岡 2019b：78頁）。岡によるこれらのワインボトル関連の報告は、出土したガラス製品の概要報告の一部であるが、出島で飲まれていたワインの生産地の特定や出島の範囲外でも生活が洋風化していたことを指摘している点で重要である。

ワインボトルを含む近世長崎市中におけるガラス関連遺物については、田中亜貴子・田中学・片多雅樹らによって出土状況がまとめられ、ガラス比重値の調査結果から製作年代や生産地が報告されている（田中ほか 2019）。また、長崎市中より出土したガラス埴塙について取り上げ、ガラス製品の成分分析の結果も含めて近世長崎におけるガラス製作について言及している。この研究では、長崎市中から出土した国産ガラス製品との比較対象のために、長崎市

中の近世遺跡で出土したワインボトルが一例として取り上げられている。

このように、これまでの考古学的研究においては、多彩な舶来ガラスの包括的研究はみられるものの、ワインボトル単独を分析対象の中心とした研究はみられない。また、出島和蘭商館跡の各発掘調査における出土例の集成はみられるものの、それ以外の国内近世遺跡も対象として包括的に集成した例はない。このような状況から、まずはワインボトルの国内近世遺跡出土例の集成を第一に行うことが重要であると考えた。

ワインの日本伝来の時期と江戸時代における消費状況などについては、間庭辰蔵(1976)が歴史学の観点から研究している。ワインは8,000年ほど前に造られ始めたことが考古学的に判明しているが、日本にいつ伝わったのかは定かではない。しかしながら、キリスト教の儀式等において、キリストの血を意味する赤ワインは必須であったため、フランシスコ・ザビエルが来日した1549(天文18)年以降は日本にワインが持ち込まれていたと考えられる。また、その後は南蛮貿易においてポルトガル人商人や宣教師たちが日本に滞在したため、彼らが日常的に消費する酒としてもワインが持ち込まれていたであろう。一方で、戦国大名への献上品にもなっており、一乗谷朝倉氏遺跡(福井県福井市城戸ノ内町)からは、ワイングラスと考えられるガラス片が出土していることから、当時の上流階級にワインが流通していたことがうかがえる。やがて、キリスト教の禁教令が出ると、ワインはキリスト教の祭具として取り締まりの対象となる。幕府はワインなどの酒類がキリスト教の儀式に使用されることを恐れたのか、1641(寛永18)年8月に長崎オランダ商館長・マキシミアン・ル・メールに「牛肉・塩豚肉・アラク酒・イスパニア及びフランスの葡萄酒・オリーブその他キリシタンが通常使用するもの」を日本人・中国人などに売り渡し・交換・贈与することを禁止すると言い渡した。このことから、江戸時代にワインが一般的に流通することはほぼ無かったと考えられる。しかしながら間庭は、『長崎オランダ商館長の

日記』において、ワインを含む南蛮酒が「上流支配階級の贈答品の花形」(間庭 1976:94頁)であったと述べており、商館長がワインで長崎奉行をもてなしたことや、商館長から将軍へ献上されたことを指摘している。そのため、一部の上流階級にはワインが流通していたことがわかる。

間庭による指摘だけではなく、前節で述べたような流通に関する話などからも、ワインならびにワインボトルは出島の外にも流通していたことが分かっている。その流通状況を明らかにする際に、国内近世遺跡から出土したワインボトルのみを対象とするのは不十分であると考ええる。なぜなら、発掘調査において出土したガラス片のみで器種を判断するのは難しく、特にワインボトルにおいては、破片の場合には明確な違いが判別しにくい(岡 2018:78頁)からである。そのためワインボトルの流通については、文献や絵画などの史料、国内伝世品も含め、考古学的な観点のみでない広義な意味での歴史学という観点から検討することが必要である。

2 国内近世遺跡出土のフラスコ形ワインボトル集成

日本国内では、近世遺跡の発掘調査からフラスコ形ワインボトルが出土したことが報告されている(図4)。最も多く報告されているのは、オランダ人たちがワインを持ち込んで消費していた長崎出島(出島和蘭商館跡)である。いずれの調査地点においても、大量のガラス片が出土しているが、その大多数がボトル類とされる。また、出島の外である長崎市中からも、フラスコ形ワインボトルの出土が報告されている。長崎奉行所(立山役所)跡をはじめとして、町人や商人、地役人たちの居住エリアであった桜町遺跡、万才町遺跡、栄町遺跡などから出土している。また、当時中国人が滞在していた唐人屋敷跡からも出土例がみられる。

江戸府内でも、武家屋敷跡を中心にフラスコ形ワインボトルが出土しており、東京都文京区の本町遺跡、東京都新宿区の本町遺跡、同区細工町遺跡

出島和蘭商館跡
(長崎県長崎市出島町)

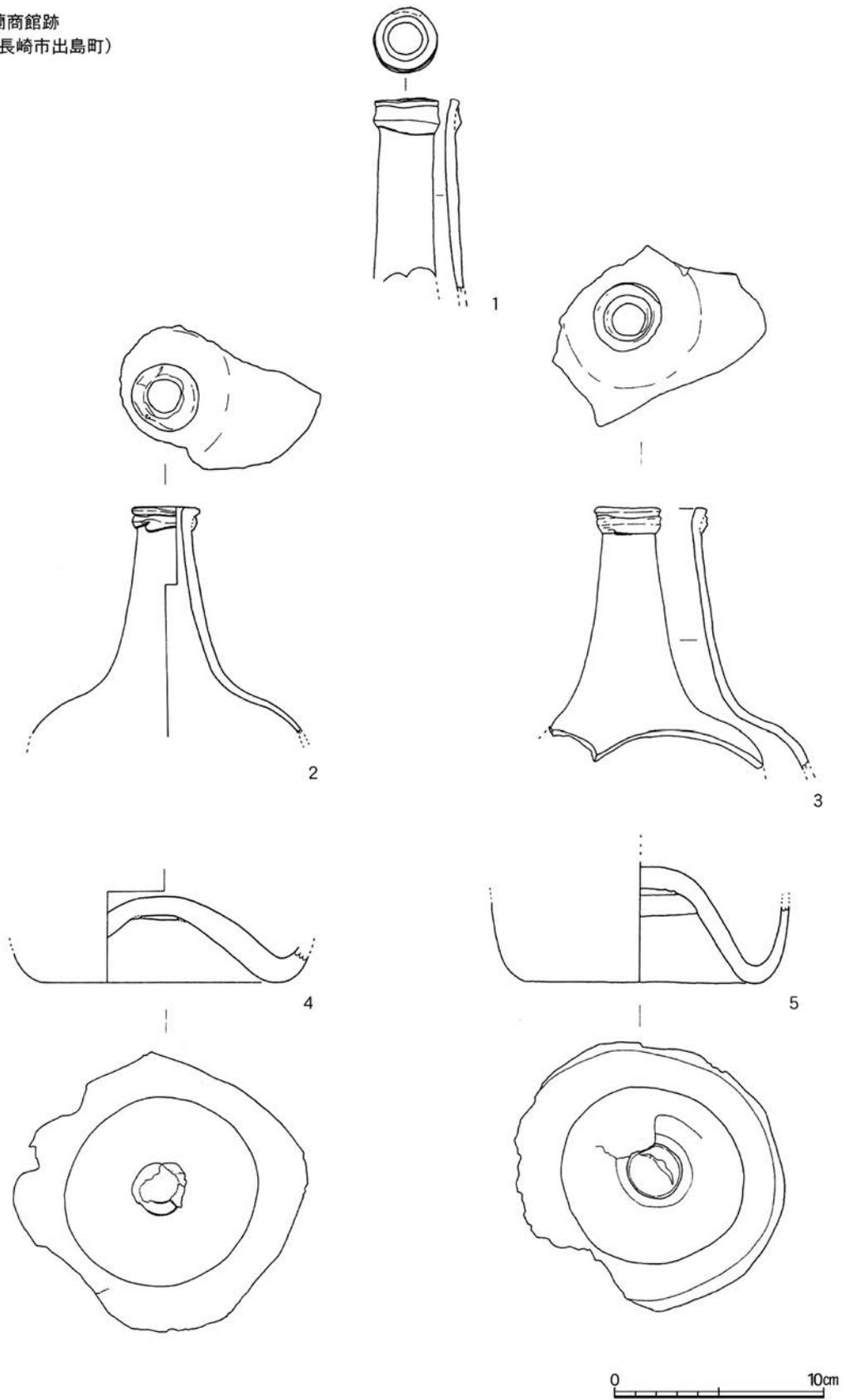
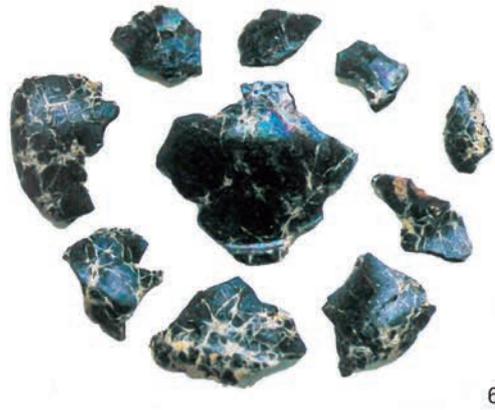
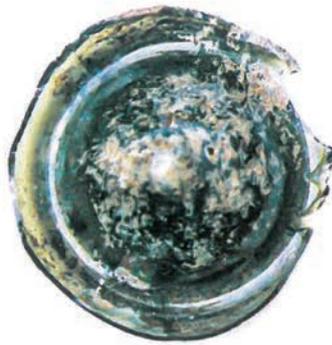


図4-1 国内近世遺跡出土ワインボトル集成図

出島和蘭商館跡
(長崎県長崎市出島町)



6



7



8



9

図4-2 国内近世遺跡出土ワインボトル集成図

長崎奉行所（立山役所）跡
（長崎県長崎市立山）

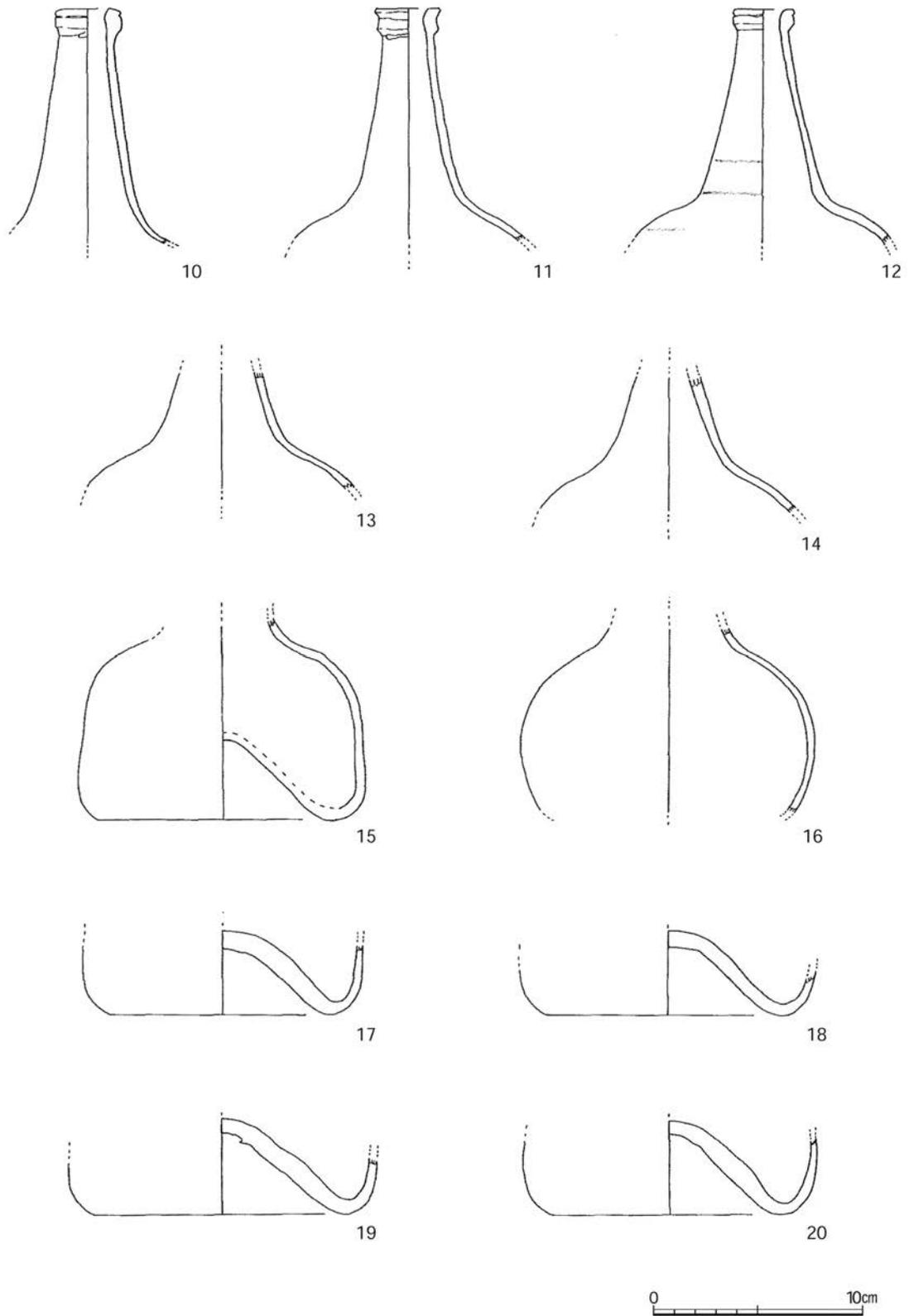
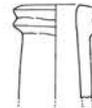


図4-3 国内近世遺跡出土ワインボトル集成図

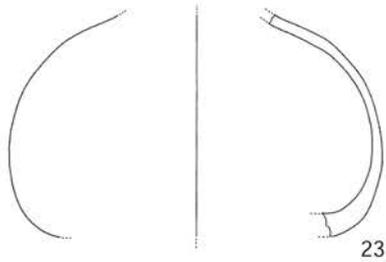
桜町遺跡
(長崎県長崎市桜町)



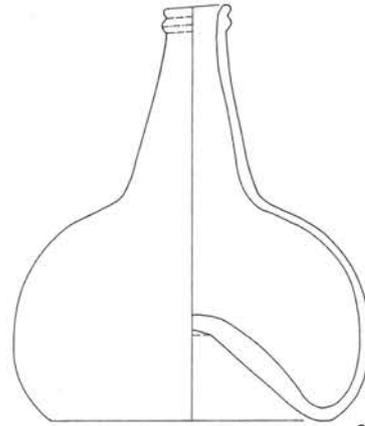
21



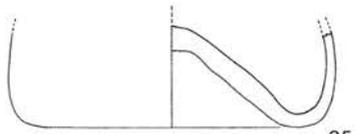
22



23

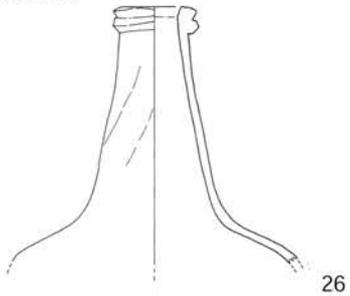


24

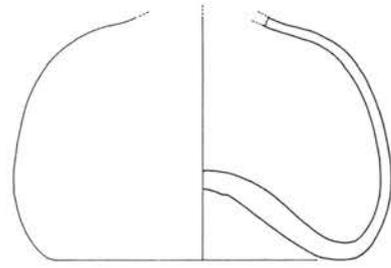


25

万才町遺跡
(長崎県長崎市万才町)

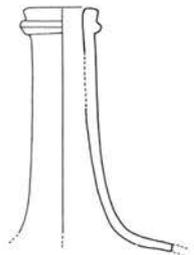


26



28

栄町遺跡
(長崎県長崎市栄町)



27

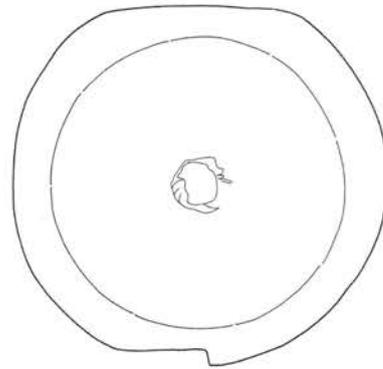
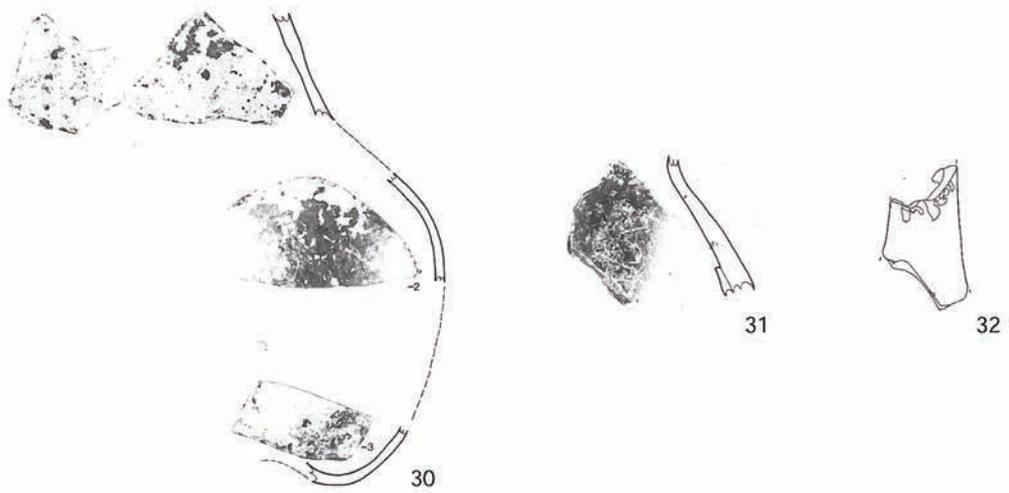


図4-4 国内近世遺跡出土ワインボトル集成図

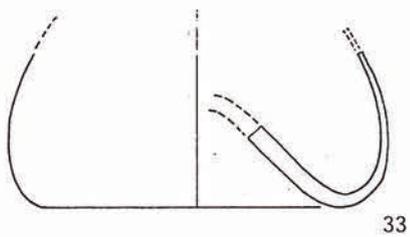
唐人屋敷跡
(長崎市館内町)



真砂遺跡
(東京都文京区本郷)



三栄町遺跡
(東京都新宿区四谷三栄町)



細工町遺跡
(東京都新宿区細工町)

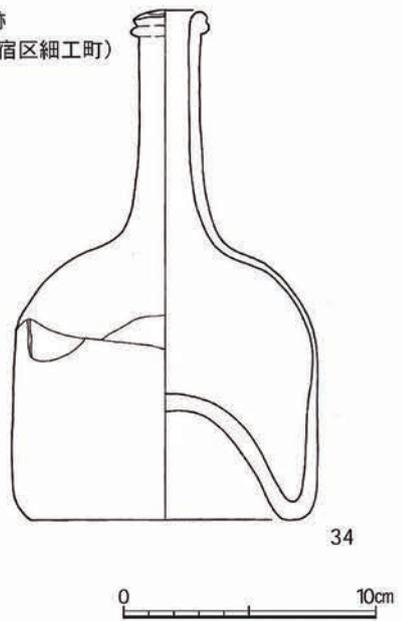
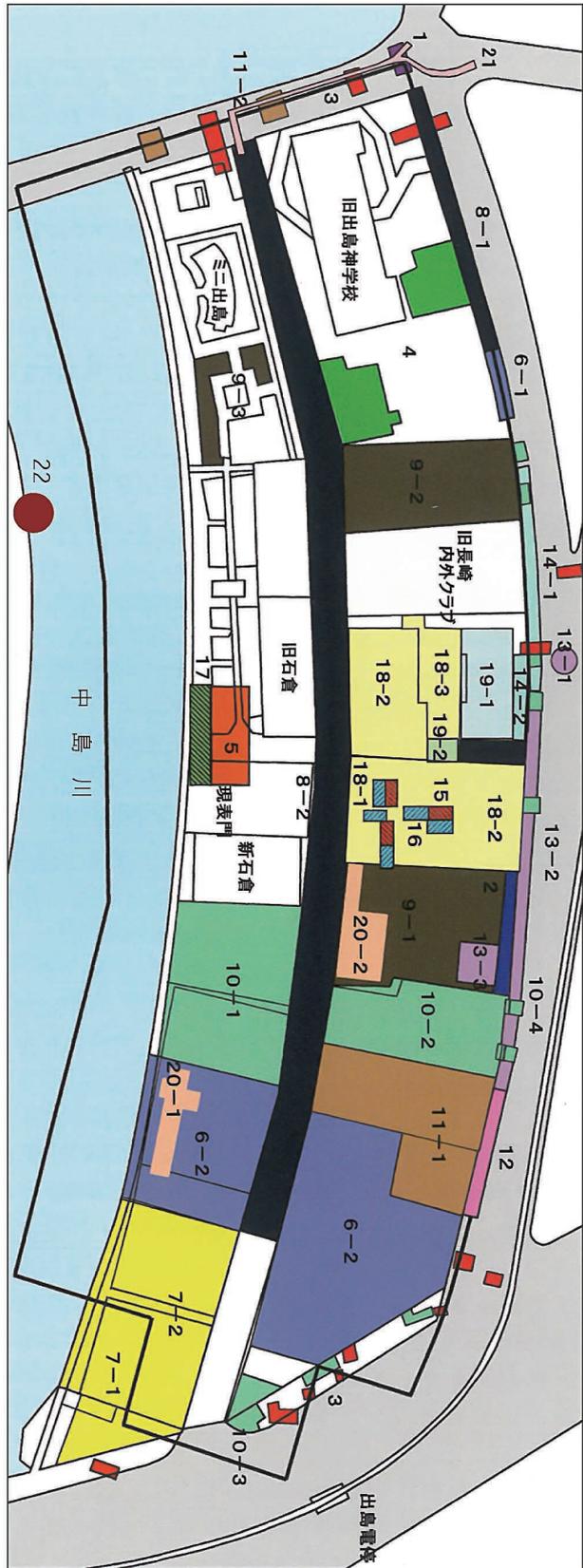


図4-5 国内近世遺跡出土ワインボトル集成図



- | | | | | | |
|----|-------------------------------|--------------------------|----|-------------------------------|-------------------------|
| 1 | 1969 (昭和 44) 年 | 汚水管工事に伴う南東部石垣確認調査 | 12 | 2003 (平成 15) 年 | 南側護岸石垣調査 |
| 2 | 1971 (昭和 46) 年 | 建設工事に伴う南側護岸石垣裏込め調査 | 13 | 2004 (平成 16) 年 | 13-1 慶応 3 年石垣確認調査 |
| 3 | 1984 (昭和 59) 年～1985 (昭和 60) 年 | 範囲確認調査 | 14 | 2005 (平成 17) 年 | 13-2 南側護岸石垣調査 |
| 4 | 1986 (昭和 61) 年 | 改築工事に伴う発掘調査 | 15 | 2006 (平成 18) 年 | 13-3 南側護岸石垣裏込め調査 |
| 5 | 1989 (平成元) 年 | 表門復元に伴う発掘調査 | 16 | 2007 (平成 19) 年 | 14-1 南側護岸石垣調査 |
| 6 | 1996 (平成 8) 年 | 6-1 南側護岸石垣調査 | 17 | 2008 (平成 20) 年 | 14-2 南側護岸石垣裏込め調査 |
| 7 | 1997 (平成 9) 年 | 6-2 西側建造物遺構調査 (第 1 期) | 18 | 2010 (平成 22) 年～2012 (平成 24) 年 | 14-1 建造物復元に伴う調査 (第 1 次) |
| 8 | 1998 (平成 10) 年 | 7-1 西側護岸石垣調査 | 19 | 2013 (平成 25) 年 | 14-2 建造物復元に伴う調査 (第 2 次) |
| 9 | 1999 (平成 11) 年 | 7-2 建造物復元に伴う調査 (第 1 期) | 20 | 2014 (平成 26) 年 | 中央広場確認調査 (第 1 期) |
| 10 | 2001 (平成 13) 年～2003 (平成 15) 年 | 8-1 南側護岸石垣調査 | 21 | 2015 (平成 27) 年 | 中央広場確認調査 (第 2 期) |
| 11 | 2002 (平成 14) 年～2003 (平成 15) 年 | 8-2 道路遺構調査 | 22 | 2016 (平成 28) 年～2017 (平成 29) 年 | 出島表門橋の架橋に伴う発掘調査 |
| | | 9-1 史跡内整備事業に伴う調査 | | | 14-1 南側護岸石垣調査 |
| | | 9-2 庭園整備事業に伴う調査 | | | 14-2 南側護岸石垣裏込め調査 |
| | | 9-3 庭園整備事業に伴う範囲確認調査 | | | 13-1 慶応 3 年石垣確認調査 |
| | | 10-1 建造物復元に伴う調査 (第 II 期) | | | 13-2 南側護岸石垣調査 |
| | | 10-2 建造物復元に伴う調査 (第 II 期) | | | 13-3 南側護岸石垣裏込め調査 |
| | | 11-1 建造物復元に伴う調査 (第 II 期) | | | 14-1 南側護岸石垣調査 |
| | | 11-2 東側護岸石垣確認調査 | | | 14-2 南側護岸石垣裏込め調査 |

図 5 出島和蘭商館跡における発掘調査地点の調査地点 (山口編 2018 : 10 頁第 3 図を一部改変)

などで報告されている。なお、平戸和蘭商館跡の報告書（註3）においては、ガラス製品の出土について言及されているものの、具体的な器種については述べられていないため、本稿には含めていない（註4）。

ここからは、ワインボトルが出土した各遺跡の概要について述べていく。各遺跡の所在位置について、出島和蘭商館跡については図5を、長崎市中の遺跡については図6を、江戸府内の遺跡については図7を参照されたい。

2-1. 出島^{おらんだ}和蘭商館跡（長崎市出島町）（図5）

出島和蘭商館跡は、国内においてワインボトルが最も多く出土する近世遺跡である。オランダ東インド会社の商館員たちがワインを持ち込んでワインボトルを廃棄しており（扇浦 2002：98頁）、1984（昭和59）年の範囲確認調査後に本格的に開始された発掘調査において大量に出土している。ワインボトル以外にも、近世陶磁器を中心とした75万点以上の遺物が出土しており、対外交易の窓口として開かれた出島の様相を解明する貴重な資料となっている。出島和蘭商館跡から出土したワインボトルについて、発掘調査の経過とともに述べていきたい。

出島における発掘調査は、1969（昭和44）年に出島中継ポンプ場の污水管バイパス工事中に東南角の石垣が出土し、当時長崎大学医学部助手の坂田邦洋氏らにより調査が行われたことに始まる。1971（昭和46）年には、建物建設工事中に南側中央西寄りの石垣と裏込石が出土し、長崎県文化課が調査を行った。

しかし、これらの調査はごく短期間で行われており、初めて本格的に調査が行われたのは、1984（昭和59）年9月～12月と1985（昭和60）年7月～1986（昭和61）年2月の2か年度にわたって長崎市教育委員会により実施された出島和蘭商館跡範囲確認調査（長崎市教育委員会編 1986）である。この調査により、出島の東南・南西・北西・北東角の石垣と、北西角と北東角をむすぶ境界線、西側の荷役場^{にやくば}における築足^{つきた}しが確認され、出島和蘭商館跡の範囲

が確認された。調査に伴って各調査地点からワインボトル・ジンボトルなどのガラス瓶片が出土している（図4-1：1～5）。

1996（平成8）年～1997（平成9）年にかけて実施された護岸石垣調査と建造物復元に伴う調査（第I期、高田・古賀編 2000）では、一番蔵の一部と、蔵の西壁にあたる石列、一番船頭^{そせき}部屋の礎石の一部、水門北東部の礎石などが確認されている。また、フラスコ形ワインボトルの底部が300個体出土したと報告され、底径が約14.5cmのものが16点・約13.5cmのものが252点・約12.0cmのものが32点と大別されている（前掲同：23頁）。

1996（平成8）年から行われた護岸石垣復元事業に伴う発掘調査（橋本ほか 2001）では、南側護岸石垣の一部と、出島築造当初の西側護岸石垣、さらに荷揚げ場の築造と拡張に伴う石垣遺構が検出された。この調査に伴って出土したガラス片のなかには、淡緑色や黒色のガラスが含まれており、ワインボトルかジンボトルの破片だとされている（前掲同：44頁）。点数は報告されていない。

1998（平成10）年～1999（平成11）年に行われた道路・カピタン別荘跡の発掘調査（高田編 2002）では、道路の玉砂利^{たまじり}舗装^{ほそう}面^{かわら}や瓦ぶきの側溝、カピタン別荘^{そせき}の礎石などの遺構が確認された。注目される遺物としては、庭園跡から解体痕のない牛の骨が6個体出土しており、出島の庭園における動物遺体の埋葬例だと考えられている。出島道路から出土したワインボトル片はほとんどフラスコ形とされ、頸部1,545点・底部1,097点・胴部2,181点が出土している（前掲同：40頁）。カピタン別荘跡からは、1,650点におよぶワインボトル片が出土した（前掲同：126頁）が、形状の分類および個体数などの報告はされていない。

2001（平成13）年～2002（平成14）年にかけて行われた護岸石垣の確認調査（高田・下田編 2003）では、南側護岸石垣のラインがほぼ明確となった。調査に伴って、ワインボトル片が50点出土したことが報告されている。ただし、出土したワインボトルの形状は報告されていないため、フラスコ形以外の

ボトルも含まれている可能性がある。

2001（平成13）年～2003（平成15）年にかけて行われた建造物復元に伴う調査（第Ⅱ期、山口・豊田編 2008）では、三番蔵・^{はいれいひっしやらんじん}拝礼筆者蘭人部屋・カピタン部屋・^{おと}乙名部屋などの建物遺構を検出した。建物遺構からは、大量のガラス片が出土している。まず、三番蔵からは、ワインボトルの口部11点・胴部128点・底部84点が出土したと報告されている。いずれも小破片であるため、形状の分類および個体数の推測は行われていない（前掲同：157頁）。^{はいれいひっしやらんじん}拝礼筆者蘭人部屋からは、ワインボトルの口部254点・胴部2,651点・底部1,047点の出土が報告されている。同様に詳細は報告されていない（前掲同：176頁）。カピタン部屋からは、出土したガラス片総数6,921点の主体がワインボトル片であった。このうち、フラスコ形ワインボトルは、口部349点・胴部2,935点・底部706点と報告されている（前掲同：226頁）。最後に、乙名部屋からは、フラスコ形ワインボトルが口部219点・胴部1,448点・底部299点報告されている（前掲同：285頁）。これらの調査で出土したワインボトル片は、出土点数が膨大であったか、破片が多かったため、点数のみの報告で実測図は掲載されていない。写真図版のみ、岡による論考（岡 2008）の中に2点掲載されている（図4-2：6、7）。

2003（平成15）年～2005（平成17）年にかけて行われた南側護岸石垣発掘調査（山口ほか編 2010）において、まず2003（平成15）年にカピタン部屋涼所および乙名部屋付近の護岸石垣を調査し、石積みが検出された。2004（平成16）年度には、南側護岸石垣の中央部の調査により、石垣の3種類の裏込め工法が確認された。また、1867（慶応3）年築造の石垣の一部を確認し、胴木や立杭が良好な状態で検出された。2005（平成17）年度の調査では、石垣前面からコンプラ瓶の一括廃棄などが確認されている。調査に伴って出土したフラスコ形ワインボトル片は口部32点・胴部313点・底部120点である。この調査地点では、現在のワインボトルの形状と酷似する「長筒形」のワインボトルのほうがより多く確認

されている。これらは19世紀前半以降にみられる形状のもので、陶磁器片も同様に19世紀前半から中頃のものも多く出土した（前掲同：97頁）。

2010（平成22）年～2014（平成26）年にかけて行われた建造物復元に伴う発掘調査（第Ⅲ期・第Ⅳ期、山口・田中編 2018a・2018b）では、十四番蔵の礎石の下層から検出されたアマカワ遺構（註5）、銅蔵跡の礎石・棹銅や銅粒などの遺物、出島町人部屋の礎石列などが検出・出土した。調査に伴って、合計16,167点のガラス片が出土し、そのうちの3,588点がフラスコ形ワインボトルであった。完形器物の半分に満たない破片が3,239点で、個体数の分析は難しいため報告されていない（山口・田中編 2018b：5頁）。岡による論考（岡 2018）のなかで、写真図版が2点掲載されている（図4-2：8、9）。

2016（平成28）年～2017（平成29）年にかけて行われた、江戸町と出島の間を流れている中島川河川改修事業に伴う発掘調査（山口ほか編 2019）は、主に明治初期に行われた中島川変流工事の内容を明らかにするために行われた。江戸時代と明治時代に築かれた石垣が検出されている。調査地点からは、合計850点のガラス片が出土し、46点のフラスコ形ワインボトルが、個体数では少なくとも5個体ほど出土したと報告されている。なお、同地点からは「現代的なワインボトルに似た形状」のものの方が多く出土している（前掲同：109頁）。

以上、出島和蘭商館跡の調査順に、遺構の検出状況やワインボトルの出土状況を簡単にまとめた。前述のとおり、出島和蘭商館跡においては、膨大な数の破片が出土するため、それぞれの個体数などの特定はあまり行われておらず、多くの報告書では、実測図や写真などの図版、観察表などは作成されていない。そのため、実際は報告数をはるかに超える量の破片が出土していると考えられる。また、遺構との共伴関係などの詳細も不明である場合が多い。しかしながら、これほど大量のワインボトルの破片が出土する状況からは、商館員たちがワインを日常的に飲用していた往時の様子が垣間見える。

2-2. 長崎市中の遺跡 (図6)

次に、出島和蘭商館跡の次にフラスコ形ワインボトル出土報告数が多い、長崎市中の遺跡について取り上げる。

2-2-1. 長崎奉行所(立山役所)跡(長崎市立山)

長崎奉行所(立山役所)は、幕府が設置した長崎の地方長官である長崎奉行の役所を指す。もともと長崎奉行所は本博多町(長崎市万才町)に設置されていたが、奉行屋敷の二分化のため移転することとなった。西役所は出島の近くに移転し、東役所は北東の立山に移転した。奉行所としての役割はほぼ立山役所が担っていたとされ、貿易の管轄と監視・キリシタン取り締まり・御用物の調達・外交・長崎警備の監督などを行った。

フラスコ形ワインボトルが出土したのは、2002(平成14)年~2004(平成16)年に行われた発掘調査である(川口編 2005)。近代ごろまで使用されていたとみられる溝から、ガラス破片が多数出土しており、その中の大半がワインボトルだとされる(前掲同:90頁)。個体数も報告されており、底部23個体・口部13個体が出土し、そのうち11個体が図化されている(図4-3:10~20)。しかしながら、調査範囲が奉行所の本体部分から外れているため、出土遺物の多くは奉行や目付の周辺で使用されたものではなく、与力・同心などの家臣や役人が使用したものが多くとされる(前掲同:157頁)。そのため、長崎奉行が実際にワインを消費していたことは、これまでの調査によっては裏付けられていない。

2-2-2. 桜町遺跡(長崎市桜町)

桜町遺跡(長崎市桜町)では、これまでの調査で合計5個体のフラスコ形ワインボトルが報告されている。古くはクルス町とも称され、キリシタン墓地や教会があったとされる。桜町には、1611(慶長16)年にサン・フランシスコ教会が建設されるが、その3年後に破壊され、1620(元和6)年からは牢屋となっていた。

1998(平成10)年の調査(扇浦編 2000)では、桜町の範囲東側の一部が調査された。江戸時代の町人の屋敷地に該当する地点で、合計3個体のフラス

コ形ワインボトルが報告されている(図4-4:21~23)。

2006(平成18)年の調査(宮下編 2008)では、前掲の調査地点域と隣接する区域で行われた。旧町名は引地町(ひきじまち)とって、桜町東側縁辺に位置する。近世に属する石垣などの20基の遺構と、1663(寛文3)年の大火層などが検出されている。この調査地点からは、フラスコ形ワインボトルが1個体報告されている(図4-4:24)。

2017(平成29)年の調査(宮下編 2019)では、フラスコ形ワインボトルの底部1個体(図4-5:25)が報告されている。調査地点は、旧豊後町に位置し、建物跡や石垣、土坑などの遺構が検出されている。

2-2-3. 万才町遺跡(長崎市万才町)

万才町遺跡は、かつての長崎県庁がある区域で、庁舎の建て替えなどに伴って発掘調査が行われている。万才町遺跡周辺は、大友純忠により建設された長崎六町の一つである大村町および平戸町に相当する。長崎奉行所立山役所と西役所をつなぐ幹線道路(現国道34号線)の沿線に位置しており、有力な町人・商人・地役人などが居住していた。

1993(平成5)年の調査(宮崎・寺田編 1995)では、16世紀末~19世紀にかけての建物遺構・土坑・井戸・石垣・鑄造遺構などの遺構群が検出され、万才町遺跡周辺に近世の遺構が良好な状態で残っていることがわかった。ガラス製品は、1,600点あまりが出土しており、フラスコ形ワインボトルが1個体報告されている(図4-4:26)。破片数は報告されていない。

2-2-4. 栄町遺跡(長崎市栄町)

栄町遺跡は、旧町名を袋町(ふくろまち)・本紺屋町(ほんこんやまち)・酒屋町(さかやまち)といい、1597(慶長2)年以降に設置された長崎の外町にあたる。

1992(平成4)年度の調査(永松編 1993)の調査地点は、旧本紺屋町に所在する。調査の結果、町屋跡が検出し、合計2個体のフラスコ形ワインボトルが報告されている(図4-4:27, 28)。



図6-1 長崎市中のワインボトル出土遺跡 (国土地理院地図をもとに作成)

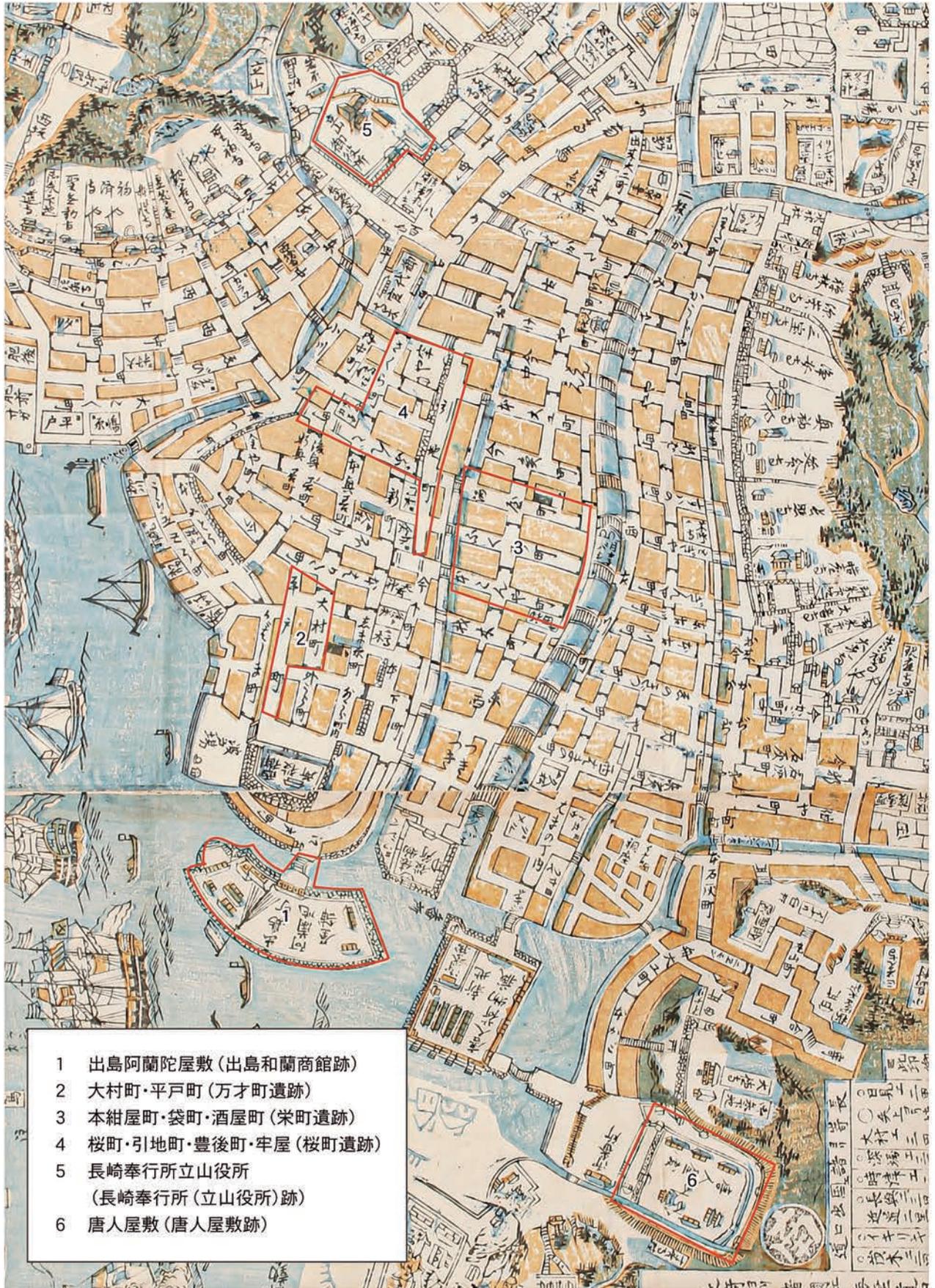


図6-2 長崎市中のワインボトル出土遺跡 (西南学院大学博物館蔵「肥前長崎図」部分、同館提供をもとに作成)

2-2-5. 唐人屋敷跡（長崎市館内町）

唐人屋敷跡は、1688（元禄元）年に建設された中国人の滞在施設である。唐人屋敷が設置されるまでは、貿易のために来航した中国人たちは長崎市中に滞在していた。しかしながら、江戸幕府は密貿易や唐船経由によるキリスト教伝播への懸念から、中国人と日本人との接触を断ち、隔離収容する施設の建設に踏み切った。唐人屋敷が建設されると、許可者以外の中国人の外出は禁じられ、遊女以外の女性の出入りも禁止されていた。竣工当初は6,800坪ほどであったが、何度か拡張されており、1751（寛延4）年には9,373坪であったとされる。出島の約2.4倍の広さで、2,000人余りが収容可能であった。敷地の周辺は練堀で囲まれており、その外側には水堀や空堀が配され、さらに外周は竹垣で囲われていた。四隅には番所があり、厳重な監視体制が敷かれていた。1859（安政6）年の開国後は、唐人屋敷は廃屋化し、1870（明治3）年に焼失したのち、跡地は市民に分譲された（長崎市史編さん委員会編2012、扇浦編2020）。

2012（平成24）年度の調査では、唐人屋敷建設期（1688）の整地層下から屋敷開設以前の遺物が出土し、2017（平成29）年度の調査では石垣前面から主に18世紀の遺物が出土した。2016（平成28）年から2017（平成29）年度にかけて行われた調査では、唐人屋敷建設以降から1730年代までの廃棄物とみられる遺物や、18～19世紀の遺物が出土した。1770年前後とみられる層から、フラスコ形ワインボトルが出土している（図4-5：29）。また、18世紀から19世紀にかけては、ジンボトルやヨーロッパ製のガラス杯が出土することから、唐人屋敷内においてもワインやジンが飲まれていたことが示唆される（扇浦編2020：74頁）。

以上、出島と蘭商館跡以外の、長崎市中のフラスコ形ワインボトルが出土した近世遺跡について簡単にまとめた。出土例を概観すると、長崎市中に居住していた与力・同心などの家臣、有力な町人・商人などへの広い分布が確認されている状況である。また、ワインボトルが出土した調査地点からは、同時

期にオランダからもたらされたガラス瓶であるジンボトルの出土例も多くみられた。ワインボトルに限らず、オランダ製のボトルが日本人にとっては珍しい「渡り」のガラスであり、長崎市中の人々に享受されていた様子がうかがわれる。さらに、中国人が滞在していた唐人屋敷跡においてもワインボトルやジンボトル、ガラス杯などの出土が確認されており、何らかの経緯で唐人屋敷にも西洋の酒が持ち込まれ、消費されていた可能性を確認できた。

2-3. 江戸府内の遺跡（図7）

江戸府内の近世遺跡からも、ワインボトルは多数出土している（小林2021：234頁）。以下、江戸府内出土遺跡の概要や出土例を述べる。

2-3-1. 真砂遺跡（東京都文京区）

真砂遺跡は、現在の東京大学付近の文京区本郷に位置する。1984（昭和59）年～1985（昭和60）年にかけて行われた第1地点の発掘調査（小林編1987）では、フラスコ形ワインボトルが2個体報告されている（図4-5：30、31）。江戸府内の近世遺跡における初めての報告例で、「オランダで17世紀後半～18世紀初頭に制作されたもの」とされる（前掲同：333頁）。この調査地点は、1704（宝永元）年の絵図と比較すると、「小笠原佐渡守御領地」の北東角に位置し、細長い屋敷地の一番奥の部分であったことがわかっている。

1989（平成元）年～1991（平成3）年にかけて行われた第2地点での発掘調査（小林ほか編1991）でも、フラスコ形ワインボトルの頸部と思われるガラス片（図4-5：32）が出土している。出土した53号遺構は遺物の出土量が少なく、時期同定はされていない。調査地点は、1704（宝永元）年から旗本・彦坂九兵衛が屋敷地として拝領を受け、1758（宝暦8）年に北側一部が吉田久左衛門に切坪相対替（註6）となっている（前掲同：270～271頁）。

真砂遺跡においてフラスコ形ワインボトルが出土した調査地点は、ワインボトルが廃棄されたと想定される年代を考えると、第1地点が藩主クラスの屋敷跡、第2地点が旗本の屋敷跡であった。彦坂家



図7 江戸府内のワインボトル出土遺跡 (国土地理院地図をもとに作成)

は、駿河町奉行・大坂町奉行・大目付・日光奉行などの役職に就いた家系であり、3000石という高い石高を持ち、準大名クラスの家柄であった（前掲同：271頁）。位の高い人物が居住していた地点でフラスコ形ワインボトルが出土していることが注目される。

2-3-2. 三栄町遺跡（東京都新宿区）

三栄町遺跡は東京都新宿区四谷三栄町に所在する遺跡で、新宿歴史博物館の建設に伴って1985（昭和60）年～1986（昭和61）年に発掘調査が行われた（東京都新宿区教育委員会編 1988）。調査地点周辺は江戸時代に拝領屋敷（註7）が並んでいた。江戸時代の絵図と比較すると、17世紀末までは「伊賀者」が拝領を受けており、同時期の地下室（註8）と遺構が検出されている。18世紀初頭から後半までは、地下室・土坑・井戸などの遺構が検出されている。さらにこれ以降は「伊賀者」の屋敷は解体され、個人の拝領者の屋敷となっている。以降19世紀末ごろまでは、屋敷割の細分化が進み、拝領者の入れ替わりが激しくなったようだ。

ガラス製品は近世期に属するものが29点報告されている。その中に地下室とされる遺構から出土したフラスコ形ワインボトル1個体が報告されている（図4-5：33）。

2-3-3. 細工町遺跡（東京都新宿区）

細工町遺跡は、東京都新宿区細工町に位置する遺跡で、江戸城外堀付近に位置する。江戸時代には細工同心の拝領屋敷で、周辺には尾張名古屋藩徳川家上屋敷・若狭小浜藩酒井家下屋敷・近江三上藩遠藤家下屋敷・丹波園部藩小出家下屋敷などの大名屋敷、旗本や御家人などの屋敷地があった。

1989（平成元）年の調査（新宿区厚生部遺跡調査会編 1992）において、町屋の地下室とみられる遺構からワインボトルが1個体出土している（図4-5：34）。この地下室は、底面・壁面とも調整が丁寧に施されており、北壁隅の2基の柱穴には転用材を組み合わせた柱が打たれていた。入口もしくは、上屋施設に伴うものと考えられている。調査区の間では第Ⅱ期（19世紀前半～中頃）にあたり、

1,203点の遺物片が一括廃棄の状況で出土した。おそらく、地下室がゴミ穴として転用された例と考えられている。

以上、フラスコ形ワインボトルが出土した江戸府内の遺跡について簡単にまとめた。いずれも、武家屋敷や拝領屋敷の敷地内で、地下室（穴蔵）などから出土している例もある。長崎市中同様、同じ調査地点内からジンボトルも出土例がみられる。これらのことから、江戸市中にもワインボトルやジンボトルがある程度もたらされていたことがわかる。また、真砂遺跡などの発掘調査に携わった小林克は、江戸府内の遺跡から出土するワインボトルについて「珍しい容器として抹茶などの席でも使われていたものもあり、そうした二次的な利用は江戸に持ち込まれた当初から行われていたと思われる」（小林2001：268頁）と、ボトルの二次利用について言及している。二次利用についての具体的な状況が裏付けられる出土例は報告されていないが、歴史史料や伝世品などと対照することによって、ワインボトルの再利用状況についてある程度分析することが可能であろう。

3 フラスコ形ワインボトルの流通状況についての検討

ワインボトルを含むオランダから持ち込まれた酒瓶は、内容物が消費された後も、容器自体が貴重な舶来品として国内に流通していた、もしくは再利用されていたと考えられている。ここからは、文献や絵画などの歴史史料をもとに、日本人にワインやワインボトルがどのように捉えられていたのかを検討する。また、ワインボトルの流通状況や使用状況について、文献と国内伝世品をもとに検討していく。

3-1. 絵画に描かれたワインボトル

江戸時代には、出島の様子やオランダ人をモチーフにした絵画が描かれていた。長崎版画においては、オランダ人たちの食事の様子がしばしば描かれた。やはり、食文化の違いというのも当時の人々に



図8 阿蘭陀人食事之図（長崎市歴史文化博物館蔵、同館提供）

としては関心を寄せるものであったのだろう。また、食事風景においては、オランダ人が口にしている料理だけでなく、テーブルやイス、皿、ナイフやフォークなど、あらゆるものが日本在来の文化とは異なっている。それらすべてが、異国情緒を感じさせるものであったことは言うまでもない。ここからは、江戸時代の絵画に描かれたワインボトルについて紹介する。

3-1-1. 長崎版画

長崎版画は、江戸時代の長崎で版行された木版画で、中国やオランダなどの人・文物・風俗が画題となっていた。「最大の特色は異国情趣に特化した点」（植松・印田編 2017：126頁）で、異国情緒のある長崎の土産物として人気を博した。

まず一つ目に、「阿蘭陀人食事之図」（長崎歴史文化博物館蔵、図8）を紹介する。この長崎版画は、18世紀に手彩色で描かれたとされ、長崎版画初期の作品と考えられている。テーブルを囲んで食事をするオランダ人と、その従者が描かれている。ナイ

フ・フォーク・食器類の並べ方などには正確さを欠くが、グラス・ボトル・唾壺などについては「よく描けている」（植松・印田編 2017：165頁）ものと評価されている。画面左側に、ジンボトルを従者が手に持ってオランダ人のグラスに注いでいる場面が描かれている。また、画面手前左端にはジンボトルとワインボトルが並んで描かれている。

次に、「阿蘭陀人康楽之図」（神戸市立博物館蔵、図9）を紹介する。右側の男性が座っている椅子にはVOCのマークが描かれているが、当時出島での滞在を禁止されていたオランダ人の女性が描かれているため、出島における風景を描いたものではなく舶来した絵画をもとに描かれたとされる（註9）。酒を酌み交わすオランダ人たちと、その傍らに従者が描かれている。右側の男性の足元に転がっているのがフラスコ形ワインボトルとみられる。これらの長崎版画から以下のことが推察される。

まず、オランダ人の食事風景には多くの場合酒が共に描かれているため、ワインやジンなどの酒はオ



図9 阿蘭陀人康樂之図（資料番号：11章-並061）（神戸市立博物館蔵、同館提供）

ランダ人たちの食事に欠かせないものだということが一般的に知られていた可能性がある。また、酒瓶が比較的正確に描かれているのは、形の単純さという点で描きやすいものであった可能性が挙げられるが、ナイフやフォークなどに比べて目にする機会が多かったという可能性もある。

しかしながら、長崎版画は出島や長崎市中における風景を描いたものばかりでなく、「阿蘭陀人康樂之図」のように西洋絵画をもとにして描かれたものも存在する。そして、土産品として生産されたものであるため、絵画そのものに写実性が追及されたとはいえづらい。

3-1-2. 「出島蘭館図巻」(西南学院大学博物館蔵)

「出島蘭館図巻」(図10、11)は、江戸時代中期に制作されたとみられる、出島の様子を描いた絵画である。1699(元禄12)年に幕府勘定奉行・荻原重秀おさわらしげひでが長崎を巡察し、唐絵目利兼御用絵師・渡辺秀石わたなべしゅうせきに唐人屋敷と出島の絵図制作を命じた。その際に描いたと伝わる『長崎唐蘭館図巻(神戸市立博物館

蔵)』の、蘭館部分のみを写したものがこの「出島蘭館図巻」であると考えられている。出島に滞在していた商館員たちの日常生活に焦点を当てたものと考えられる。また、役人として出島に出入りしていた日本人の姿や、出島で飼われていたさまざまな動物たちが描かれている。

本史料の中には二つの場面においてワインボトルが描かれていることが指摘されている(鬼東2021:107頁)。一つはよろいびつ 罎櫃と思われる箱の上にジンボトルと並んで置かれており(図10)、いま一つは、従者が手に持っている(図11)。いずれのワインボトルにも、白い布か紙で覆ったような封がされている。材質や封の方法をこの絵図から特定することは難しい。しかしながら、封がされている状態のワインボトルを描いた例は珍しく、出島で使用されていたワインボトルの密封・保管方法を検討するうえで貴重な資料である。



図10 「出島蘭館図巻」部分（西南学院大学博物館蔵、同館提供）



図11 「出島蘭館図巻」部分（西南学院大学博物館蔵、同館提供）



図12 『蘭説弁惑』2巻（国立国会図書館デジタルコレクションよりトリミングして転載）



図13 「きぬたふらすこ」と呼ばれていたものと同形状と考えられるワインボトル（Gawronski 2018: p. 272）

3-2. ワインボトルを取り上げた文献

ヨーロッパの学問について学ぶ「蘭学」が盛んになると、蘭学者たちによってオランダの風俗・文化についての概説書が著された。そのような概説書の中には、ワインの解説とともにボトルが図示された例がある。今回はオランダの概説書の中から、永松実の研究（1993）においても参考として取り上げられている、大槻玄沢『蘭説弁惑』^{おおつきげんたく らんせつべんわく}（国立国会図書館蔵）を取り上げる。翻刻は杉本つとむによるもの（杉本解説・注1972）を参考にした。

『蘭説弁惑』は、蘭学者・大槻玄沢のオランダに関する夜話を門人である有馬元晁^{げんちやう}が書き記したものである。1787（天明7）年に成稿した。この史料では、オランダの国名の由来から、オランダ人の特徴、食器や食料など食文化に関すること、動植物、

世界地図などが紹介されている。その中の一つに、「葡萄酒」（前掲同：152頁）という項目があり、ワインについて紹介されている。それによれば、ワインは「みなぶどうをもて醸したるもの」（前掲同：152頁）とされる。当時は日本語で「うゑいん」（前掲同：152頁）と表記していたようだ。また、製法によって「ぶどう酒、あらき、ちんた」（前掲同：153頁）という名を使い分けていると解説している。これによって、当時ワインがこれらの呼称でも呼ばれていたと考えられる。

本文とは別にワインボトルの図（図12）を伴う。フラスコ形ワインボトルとみられる「ろんで・ぼつとる」（前掲同：160頁）は、「五合たらず入 俗にこれを丸ふらすことよふ」（前掲同：160頁）と、図中に簡単な解説を伴う。また、本文には「ふらすこ

は本名「ふれすく」此方にいふ類のものにはあらず。油葉名酒などいる、硝子器^{びいどろうつは}をいふ。ここに諸図を出して、これを示す」(前掲同：165頁)とある。この文章からも、「丸ふらすこ」が「名酒」を入れていたボトルの一種であることがわかる。なお、隣に描かれているもう一つのワインボトルは「きぬたふらすこ」(前掲同：160頁)とされているが、これは“Mallet”(木槌)とよばれるワインボトルであると考えられる(図13)。フラスコ形とほぼ同時期にヨーロッパで製造されていたもので、日本においては洗濯道具の一種として使用された^{きぬた}碇^ががその呼称の由来となったと考えられる。

このように、『蘭説弁惑』は、ワインという酒そのものの紹介と、ワインに関連してオランダのガラス製品であるボトル類を共に紹介した希少な例である。蘭学者たちにとってワインやワインボトルがオランダの代表的なモノのひとつとして捉えられていた状況がうかがわれる。

3-3. 流通過程の検討

前節では、絵画や文献資料からワインボトルに対する日本人の目線をたどってきた。それでは、実際にワインボトルはどのように流通していったのであろうか。本節では、はじめにワインもしくはワインボトルの個人による購入記録を分析し、値段の情報や、どのような人物がワインやワインボトルを購入していたのか、その入手方法なども併せて検討していく。つぎに、長崎において本貿易とは別に行われていた個人間での貿易である「脇荷貿易」^{わきに}、江戸時代に各都市に存在した輸入商品販売店である「唐高麗物屋」^{とうこ}、同じく国産・舶来のガラス販売店である「ギヤマン問屋」に関する史料を分析し、入手先の検討を行う。

3-3-1. 購入記録の分析

司馬江漢^{しばこうかん}『江漢西遊日記』^{こうかんさいゆう}(東京国立博物館蔵)

司馬江漢は江戸時代後期の洋風画家であり、蘭学者である。西洋画の研究をする過程で、前野良^{まえのりょう}沢^{たく}・大槻玄沢^{おおつきげんたく}らの助けにより蘭書の記事などに触れている。1788(天明8)年から翌年にかけて江戸か

ら長崎へ旅行した際の日記が『江漢西遊日記』である。司馬江漢にとってこの旅行は西洋画の研究を目的とするものであったが、西洋理学への関心を深める機会ともなった。ここでは、『江漢西遊日記』のなかでもワインボトルに関する箇所を紹介する。翻刻は芳賀徹・太田理恵子によるもの(芳賀・太田校注 1986)を使用する。

司馬江漢は長崎を訪れた際に出島に入っている。その際に目にしたことを日記に綴っているのだが、その中にワインボトルに関する記述が含まれる。1788(天明8)年10月25日には、「黒坊二人、銀の盆の上に金を焼付したるコップとフラスコとのせ、傍らに立つ。其コップにて酒を呑む。アネイス・ウエインと云焼酒也。是はウイキヨウにて造る酒なり」(前掲同：116頁)とある。フラスコはフラスコ形のワインボトルを指すと考えられるが、この時その中に入っていたのはウイキヨウで造られたフェネル酒のようである。また同年11月3日には、「近日此地を出立せんとて、船に乗りかえるべしとて聞くに、大坂迄船賃雑用共に、一人前七十五匁と云。ポーフラスコ壺本に付き六十四文、六七本買ふ」(前掲同：120頁)とある。この「ポーフラスコ」はフラスコ形ワインボトルのことを指すとされている(永松 1993：147頁)。

これらの記述から、18世紀末の出島内ではワインボトルがワイン以外の酒を入れるためにも使用されていたことや、長崎市中でワインボトルが一本64文という値段で売られていたことがわかる。詳細までは書かれていないが、直前に水夫に大坂までの船賃^{しまちり}を尋ねたという記述や、直後に中国製の帽子や縞縮^{めん}緬^{めん}なども併せて購入したという記述があるため、長崎の港周辺で手に入れたのではないだろうか。水夫が海に潜ってオランダ人たちが捨てた空き瓶を日本人が拾って販売していたという話(由水 1983：164頁)にも合致するような内容である。

鷹見泉石^{たかみ せんせき}『鷹見泉石日記』(古河歴史博物館蔵)

鷹見泉石は江戸時代後期の下総^{しもうさのくに}国古河藩士である。下総国古河城下(茨城県古河市)の藩士屋敷に生まれ、1796(寛政8)年に江戸藩邸に移り、古河

藩第10代藩主の土井利厚^{どいとしあつ}に近侍した。大塩平八郎の乱で大塩父子の召し捕りを指揮し、鎮圧に尽力したことで著名である。また、天文・暦数・地理・歴史・兵学・食物学・博物学などの研究とその資料収集に努めたことでも知られる。仕えていた土井利厚が老中となり、幕府の対ロシア人問題を専管していたため、対外応接資料調査の役務を任されていた。その経験が契機となり、蘭学と関係資料の収集にも熱心に取り組むようになる。1813（文化10）年には、大槻玄沢主催のオランダ正月（新元会）に招かれた。また、1818（文政元）年には出島オランダ商館長のヤン・コック・ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff）からヤン・ヘンドリック・ダップル（Jan Hendrik Daper）というオランダ語の名前を貰ったことや、1826（文政9）年に江戸参府中のシーボルトとビュルゲルに交流するなど、日本を訪れたオランダ人とも交流があった。

鷹見泉石に関する資料は約3,000点現存しているが、そのなかに『鷹見泉石日記』（註10）が含まれている。この日記は、1797（寛政9）年、鷹見泉石が13歳のころから73歳まで、60年間にわたるものである。この日記に、鷹見泉石がワインを購入した記録があることが指摘されているため（江後編 2011：198頁）、古河歴史博物館による翻刻本（古河歴史博物館編 2001・2003）をもとに、本稿でも詳しく見ていきたい。

まず、日記の中で最初に赤ワインを指す「ローイウエイン」が出てくるのは1827（文政10）年4月7日である。「一、ローイウエイン式、フレス（コ脱カ）岩瀬より差越、金壺分弍朱也」（古河歴史博物館編 2001：48頁）。赤ワイン2点とフレスコを岩瀬から受け取り、金一分二朱で購入したとある。岩瀬家は阿蘭陀通詞を世襲^{おらんだつうじ}していた家として知られる（長崎市史編さん委員会編 2012：531頁）。おそらく大通詞^{だいつうじ}であった7代岩瀬弥十郎のことで、阿蘭陀通詞の中でも位の高い通詞と交流するなかで、ワインを入手していたことがわかる。二つ目の記録は、1843（天保14）年3月2日の日記にある。「中山作三郎より、ローイウエインーフラスコテリヤコ二缶

コッファー到来」（古河歴史博物館編 2003：153頁）中山作三郎も岩瀬同様、阿蘭陀大通詞を務めた人物である。ローイウエインとコッフ（コップ）という組み合わせからして、フラスコテリヤコも、ガラス容器の一種であろうか。この記録では、1827（文政10）年の記録とは違って金額は書かれていない。また、同年3月6日の日記には、「中山へ二百疋遣、ローイウエインマテラウエイン有之候ハ、セ話頼遣候」（前掲同：155頁）とある。マテラウエインはマデイラ島（ポルトガル）産のワインの可能性ある（江後編 2011：198頁）。中山作三郎に金二百疋を渡して、ローイウエインとマテラウエインがあったときは持ってくるように頼んだという内容である。中山作三郎は、長崎で買い付けた輸入品を販売するという副業を行っていたとされる（織田 2021：6～7頁）。1844（天保15）年3月11日の日記には、「森山栄之助来。ローイウエインニカネール壺熊鷹等画九冊、両人之名札持参、昼支度出」とある。森山栄之助もまた阿蘭陀通詞で、アメリカ人マクドナルドから英語を学び、ペリー来航の際に通訳を務めたことで知られる（長崎市史編さん委員会編 2012：533頁）。この記録にも金額は書かれていない。同年12月28日には、「伊藤玄朴へ」「水菓ローイウエイン代一両二分」（古河歴史博物館編 2003：403頁）を持って行ったとある。伊藤玄朴は蘭方医で、長崎でシーボルトから医学を学び、1826（文政9）年にシーボルトらとオランダ商館長の江戸参府へ同行している。

これらの記録から、鷹見泉石が阿蘭陀通詞たちに依頼して、江戸府内にワインボトルが持ち込まれていたという一つの流通ルートがうかがえる。阿蘭陀通詞は、出島に滞在したオランダ人たちとの通訳と貿易の業務に携わっていたので、当時の日本人のなかでオランダ人に一番近い存在ともいえる。蘭学者たちはそのような阿蘭陀通詞と交わることでオランダの文物を手に入れていた可能性が示唆された。鷹見泉石の遺品にワインボトルは確認されていない（註11）が、19世紀前半のワインの流通についての貴重な記録であるといえる。

さて、これまでの文献史料から、18世紀末～19世紀中ごろまでのワインボトルの入手方法として二つのルートを見出すことができた。一つは、長崎市中で売られているものを購入するという方法で、もう一つは、長崎の役人などに依頼して手に入れるという方法である。いずれの方法にせよ、当時の庶民にとってはワインボトルの入手は難しいように思える。しかしながら、『江漢西遊日記』に書かれていた長崎市中でのフラスコ形ワインボトルの値段は、そこまで高額ではない。一般的に上流階級を中心に流通していたとされるワインボトルであるが、長崎市中でワインボトルが販売されていたということは、長崎市中で生活をしてきた商人や町人にとっては入手がそれほど難しくなかった可能性が高い。

3-3-2. その他の入手方法

前項では、ワインやワインボトルの購入に関する個人の記録から、ワインボトルの入手方法について考察した。本項では、個人記録には記録されていない、ワインやワインボトルのその他の入手先について検討していく。

脇に 脇荷貿易

幕府とオランダ東インド会社が行った貿易には、貿易制限額がある本貿易のほかに、「脇荷貿易」として公認されている個人貿易があった。今回は、フラスコ形ワインボトルが流通していた時期の脇荷貿易に関する、永積洋子（1979）による研究をもとに、脇荷貿易によるワインボトルの流通について検討したい。

永積は、オランダ商館長メイランが立ち上げた個人貿易協会において、最も重要な商品がガラス器であろう（永積 1979：69頁）としている。「ワイングラス、リキュールグラス、シャンペングラス、コップ、酢油入れ、マスタード入れ、塩胡椒入れ、コンポート、カラフ、ボンボン入れ、オードコロン入れ」「コップ4425個、ワイングラス1090個」（前掲同：69～70頁）などが商品として輸入されていた。しかしながら、このような豪華なガラス製品だけではなく、当時の日本人にとっては舶来のもはなんでも興味があったようだ。永積論文にも引用されて

いる、当時の阿蘭陀商館荷倉役であったフィッセルの記録を引用する。「日本人は、珍奇なものには何にでも心を奪われやすく、また彼らの趣味にかなった珍品ならば何でも買い上げてしまうのである。そして時には、われわれには何の値打ちのないものでも、きわめて高価なものになっていることがしばしばある」（庄司・沼田訳 1978：178頁）。実際に、出島和蘭商館跡から大量に廃棄されたワインボトルが出土することからも、ワインボトルはある程度利用すれば捨ててしまう程度のものであったと思われる。そのため、ワインボトルもこの「何の値打ちのないもの」に含まれることが示唆される。

さて、脇荷貿易に関する記録には、ワインやワインボトルの取引を直接裏付ける記録はみられないのだが、ワインボトルが商品として取引された可能性を示す記録について見ていきたい。まず、1828（文政11）年の「御用扣方に渡した商品一覧」（永積 1979：77頁第9表）のなかには、「空びん」900個が商品として記録されている。何に使用されていた瓶かは不明であるが、相当量が取引されていたことがわかる。量からして、この中にワインボトルが含まれている可能性も考えられる。また、これらの取引先として、掛け買いの口座を持つ日本人は全員阿蘭陀通詞であった（前掲同：75頁）。阿蘭陀通詞らの取引一覧（前掲同：78～84頁第11表）を見てみると、小通詞並の名村茂三郎が1828年9月10日に「びん 10本」、立石秀太郎が同年12月1日に「びん 6」、稽古通詞の堀千次郎が同年9月20日に「びん 16」など、種類は不明であるが、瓶を取引していたことがわかる。前節で取り上げた鷹見泉石は、阿蘭陀通詞らからワインボトルを入手していたが、それらは脇荷によってもたらされた可能性が示唆される。また、永積は脇荷によって買い上げた商品が「長崎奉行、町年寄、その他の地役人の手に渡ったものと思われる」（前掲同：76頁）としており、脇荷によって通詞が手に入れたワインボトルなどは長崎市中の上流階級にも流通していたことが考えられる。

このように、ワインボトル流入と流通の大元の一

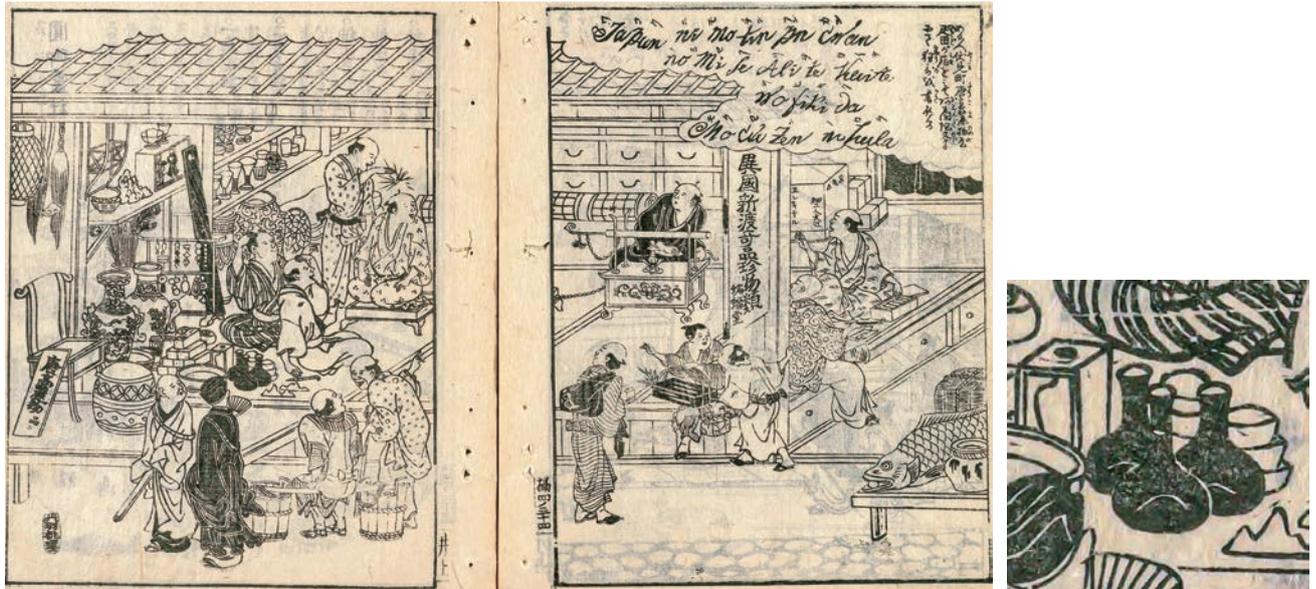


図14 (左) 『撰津名所図会』 卷四大坂部上より唐高麗物屋の図 (国立国会図書館デジタルコレクションよりトリミングして転載)
 図15 (右) ワインボトル部分 (国立国会図書館デジタルコレクションよりトリミングして転載)

つが脇荷貿易であった可能性がある。しかしながら、実際にワインやワインボトルが取引されていたかどうかは、取引の記録をより詳細に確認する必要がある。この件については今後の研究とあわせて検討していきたい。

とうこまもの
 唐高麗物屋とギヤマン問屋

江戸時代には、長崎を通して輸入されたオランダや中国の商品を販売する「唐高麗物屋」(または唐物屋)が存在していた。また、江戸にはガラス製品を商品として扱うギヤマン(註12)問屋も存在した。今回は、『撰津名所図会』から大坂の唐高麗物屋が描かれた挿絵と、江戸日本橋にあったガラス問屋「加賀屋」の引札を参考として、ワインボトルのもう一つの入手先を提示したい。

『撰津名所図会』は、1796(寛政8)年~1798(寛政10)年に刊行された。四巻大坂部上の中に、唐高麗物屋の様子を描いた挿絵がある(図14)。この挿絵は、岡泰正によっても取り上げられ(岡2018:76頁)、棚に並んだツイスト杯や切子水差しが取り上げられている。この挿絵の中に、フラスコ形ワインボトルも描かれている(図15、鬼東2021:110頁)。

この唐高麗物屋は^{ひきだ へんぶくどう}疋田蝙蝠堂といい、長崎を通して輸入されたオランダ・唐渡の商品を販売していた

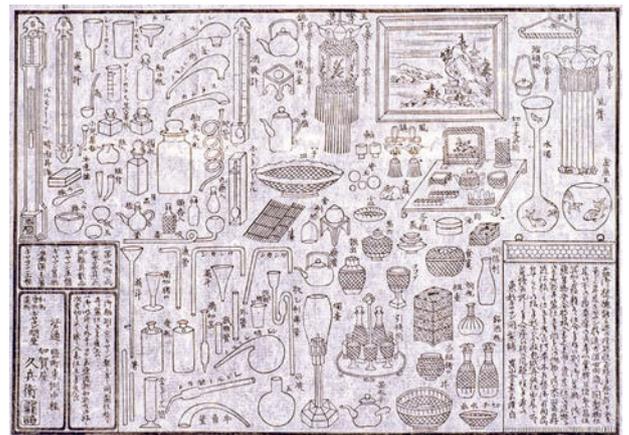


図16 加賀屋引札(再版)(資料番号bi2008-029-02)(神戸市立博物館 びいどろ史料庫コレクション、同館提供)

といわれる(宗政編 2000)。この唐高麗物屋に持ち込まれた経緯としては、長崎を訪れた大坂の商人が長崎市中で買い付けた、長崎市中の町人や商人が手に入れたものが大坂に持ち込まれた、長崎から大坂まで船を渡していた水夫が持ち込んで唐高麗物屋に売った……など、さまざまなルートが考えられる。このような唐高麗物屋が日本各都市に存在していたとすれば、長崎市中外でのワインボトルの入手方法の一つであったといえるだろう。

最後に、「加賀屋引札」(図16)を取り上げる。加賀屋は、「江戸^{どおりしおちよう}通塩町東側中程」にあったギヤマン問屋である。「和物・唐物・蘭物」という表記か

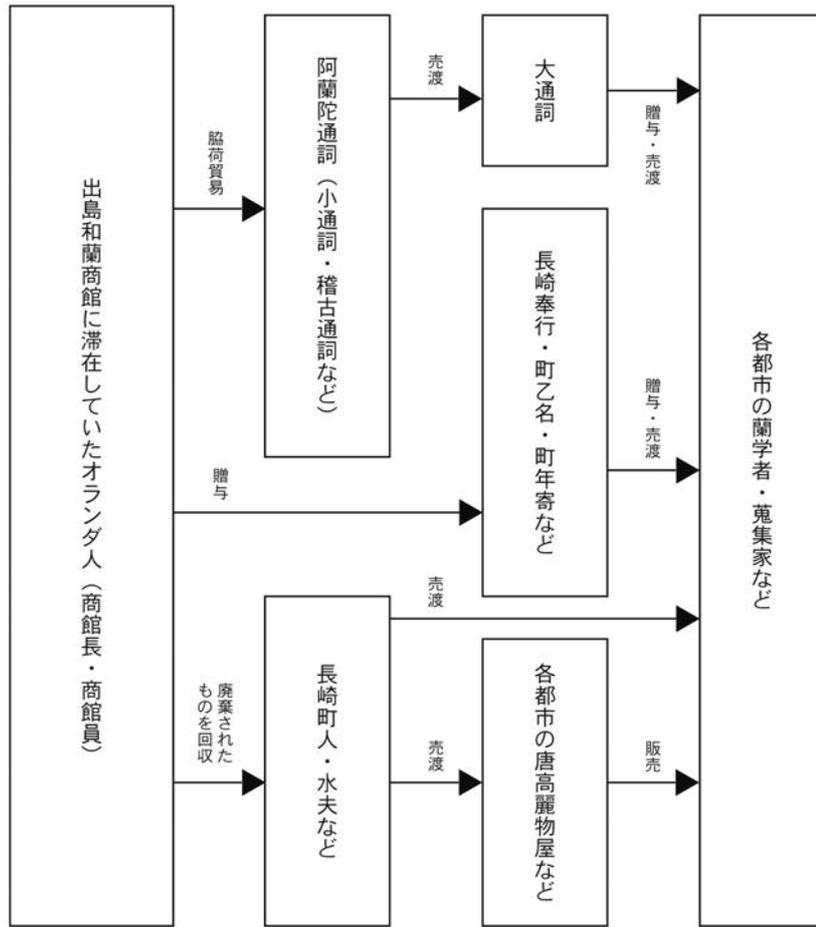


図17 フラスコ形ワインボトルの流通モデル

ら、長崎を通じて仕入れたガラス製品を扱っていたのではないかと考えられる。この引札は神戸市立博物館所蔵のもので、同館所蔵の1867（慶応3）年の箱書きのある「蛭付」の梱包紙として伝来したものである。この引札のなかにはワインボトルとみられるものは描かれていないが、先述の唐高麗物屋と同じような経路をたどって、江戸市中の輸出品を扱った問屋でもワインボトルが販売されていた可能性がある。

先行研究や、本章でこれまでに検討した史料を分析した結果、①位の低い阿蘭陀通詞が脇荷貿易でまとめて取引した空瓶が、大通詞や地役人などに売り渡され、そこからさらに各都市の武家・蘭学者・収集家などに贈与・売り渡された、②オランダ人から長崎奉行・町乙名・町年寄など長崎市中の上流階級へ贈与されたワインボトルが、各都市の武家・蘭学

者・収集家などに贈与もしくは売り渡された、③出島付近で廃棄された空瓶が、長崎町人や水夫に拾われ、長崎市中や長崎市外の各都市に持ち込まれ、唐高麗物屋などで販売された、というフラスコ形ワインボトルの流通ルートを確認することができる（図17）。

3-4. 国内伝世品の検討

フラスコ形ワインボトルは、永松実（1993）や岡泰正（2008）などが写真図版で取り上げていることからわかるように、国内伝世品の存在が知られている。長崎歴史文化博物館（長崎県長崎市）や、神戸市立博物館（兵庫県神戸市）などに国内伝世品が所蔵されていることが知られており、このうち神戸市立博物館所蔵のフラスコ形ワインボトルについて資料調査を行った。以下、神戸市立博物館に所蔵さ

れているワインボトルの国内伝世品について詳細を述べる。

緑色丸形ワイン瓶（神戸市立博物館蔵、資料番号：新1983-007、図18）

暗緑色のフラスコ形ワインボトルである。外箱はなく、神戸の美術商から購入したものである。高さは17.7cm、胴部最大径は14.3cm、底径は約12.7cmである。頸部は約8.6cmで、形成時にできたと考えられる斜め方向のしわが無数にみられる。外口径は3.0cm、内口径は約1.9cm、口縁部の厚さは約0.4~0.5cmである。上げ底部分にポンテ跡（註13）が確認できる。口縁下部には、平たい凸帯が貼り付けられている。頸部・胴部に約0.2~0.6cm程度の気泡がまばらにみられる。口縁部内面側縁辺には、口唇に直交するような細かい傷がついている。

緑色丸形ガラス瓶（神戸市立博物館蔵、資料番号：新1999-061、図19）

暗緑色のフラスコ形ワインボトルで、東京の古美術商から購入したものである。高さは17.3cm、胴部最大径は13.1cm、底径は約12.3cmである。頸部は約7.7cmで、形成時にできたと考えられる横方向のしわが若干みられる。外口径は約2.7cm、内口径は約1.9cm、口唇部の厚みは0.5cm程度である。口縁部の下には、平たい凸帯が貼り付けられており、上げ底部分にはポンテ跡が確認できる。頸部・胴部に約0.2~0.6cm程度の気泡がまばらにみられる。口縁部内面側縁辺には、0.1cm程度の間隔で口唇に直交するような傷がみられる。また、本資料は外箱を伴っており、箱蓋の裏には墨書きがある。それによれば、このワインボトルは1839（天保10）年6月吉日に、山田氏らが江戸へ引っ越す際に置いていったものとされている。削られた部分は、後世の所有者が古美術商に売るなどして手放した際に削り取ったもので、所有者の名前が表記されていたものと考えられる。外箱は、ワインボトルが丁度収まる大きさで作られており、転用されたものではなく、ワインボトルを収納するために作られたことが考えられる。

以上、フラスコ形ワインボトルの国内伝世品について、特徴を簡単に述べた。外箱を伴う資料は、同

じくオランダから持ち込まれていた洋酒瓶であるジンボトルについても伝世品があり（図20・21・22）、貴重なものとして扱われていたことがわかる。また、神戸市立博物館では錫栓^{すず}を取り付けたジンボトル（図23）や、ジンボトルにオランダ人と従者、ガラス杯を描いたもの（図24）などが所蔵されており、国内での洋酒瓶の二次利用例がわかる資料として貴重なものである。現在のところ、箱付きの伝世品に関しては、ワインボトルよりもジンボトルのほうが多く確認されているが、その理由に関しては定かではない。この点については、二次利用方法について検討していくうえで改めて考えていきたい。

4 まとめと課題

4-1. 本稿の成果

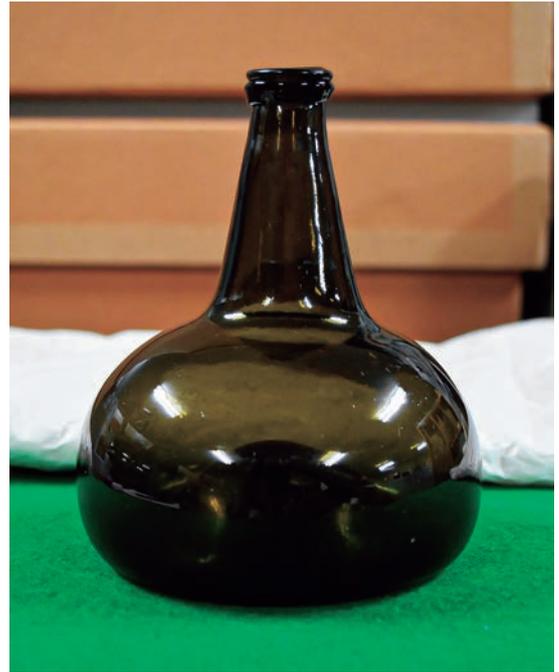
本稿では、17世紀後半~19世紀前半に日本に持ち込まれていたフラスコ形ワインボトルの流通について検討してきた。

まず、国内近世遺跡で出土したワインボトルの集成を行い、出島^{おらんだ}和蘭商館跡・長崎奉行所立山役所跡^{たてやま}・桜町遺跡^{さくらまち}・万才町遺跡^{まんざいまち}・栄町遺跡^{さかえまち}・真砂遺跡^{まご}・三栄町遺跡^{さんえいちょう}・内藤町遺跡^{ないとうちょう}・細工町遺跡^{さいくちょう}での出土事例を確認した（図4）。出島和蘭商館跡はオランダ商館員たちによってワインが消費されていた場所であったため、大量のワインボトルが出土している。総報告数は破片で20,753点、部位別の個体数は口部（頸部）個体2,279個体・胴部個体12,936個体・底部個体3,884個体である。しかしながら、これらは器形が判別しないような破片も含まれており、このすべてがフラスコ形ワインボトル片ではない。また、報告されている出土数を上回る量の破片も確認されているとされる。そのため、本稿ではそれらの全てを扱うことはできなかった。

そして、出島の範囲外である長崎市中からもワインボトルがたびたび出土していた。長崎市中における出土遺跡は、すべて出島から長崎奉行所立山役所をつなぐ幹線道路（現国道34号線）上に位置しており、当時は地役人や長崎町人が生活するエリアであ



図18 緑色丸形ワイン瓶（神戸市立博物館蔵、2021.11.13撮影）



天保十亥年	山田勝年
六月吉辰	
	越之節置土産也
	山田氏御一同江戸江御引
	(削られたか)

図19 緑色丸形ガラス瓶 (神戸市立博物館蔵、2021.11.13撮影)



図20 外箱を伴うジンボトル（「錫口緑色角瓶」資料番号：bi1957-005）（神戸市立博物館びいどろ史料庫コレクション、2021.11.13撮影）



図21 外箱を伴うジンボトル（「暗緑色角瓶」資料番号：bi1957-011）（神戸市立博物館びいどろ史料庫コレクション、2021.11.13撮影）



図22 外箱を伴うジンボトル（「ジンボトル（天保四年箱付き）」西南学院大学博物館蔵、同館提供）



図23 錫栓のついたジンボトル（「緑色角形ガラス瓶（錫栓付属）」資料番号：新1998-021）（神戸市立博物館、2021.11.13撮影）



図24 オランダ人や従者、ガラス杯などが描かれたジンボトル（「彩絵緑色阿蘭陀人文角形ガラス瓶」資料番号：24章-009）（神戸市立博物館池長孟コレクション、2021.11.13撮影）

るとともに、長崎街道の一部でもあり、人と物が多く行き交う場所であった。また、交易に訪れた中国人が滞在していた唐人屋敷跡においてもワインボトルが出土している。出島の範囲外でもワインが消費されていた、もしくはワインボトル自体が長崎市中で流通していた状況が再確認できた。

長崎から遠く離れた江戸府内の遺跡でも、ワインボトルがたびたび出土する。東京都文京区の真砂遺跡・東京都新宿区の三栄町遺跡・同区の細工町遺跡で出土例の報告がみられた。いずれも武家屋敷や拝領屋敷の敷地内から出土している。江戸市中にも何らかの流通経路をたどり、ワインやワインボトルが武家社会を中心にもたらされていた状況を再確認できた。

次に、ワインボトルの流通経路を明らかとするため、文献や絵画などの史料を分析し論を進めた。結果として、何通りかのフラスコ形ワインボトルの国内流通ルートを確認することができた。さらにワインボトルの国内伝世品も調査し、ワインボトル専用の箱が用意されていたことや、引っ越しの際の贈答品になっていたことなどを再確認した。これらのことから、ワインボトルが貴重な舶来のガラスとして珍重されていたことがわかった。

4-2. 課題

本稿では、以下のような問題点と課題が挙げられる。

一点目は、未報告資料を含めた国内近世遺跡出土のワインボトルの再調査である。特に出島和蘭商館跡の発掘調査においては、大量のガラス片が出土しており、器形が判別できないものや未整理のものもあると考えられる。また、それ以外の国内近世遺跡においても、未報告の資料があると考えられる。それらを調査することによって流通状況をより詳しく再検討することができると思う。

二点目は、海外、特にオランダ・アムステルダムにおけるワインボトル出土事例を把握し、日本国内出土事例と比較することである。また、ヨーロッパの文献や絵画資料を参考として、オランダ国内での使用状況と日本国内での使用状況の差があるのか、オランダ国内での封の仕方など、本稿で踏み込むことのできなかった問題についても、さらに今後の分析課題としたい。

三点目は、伝世品の再利用・二次利用状況の検討である。これまでに調査したワインボトルの国内伝世品には、口縁部内側に口唇に直交するような無数の傷があるという共通点があり、またその特徴はオランダ国内での伝世品にもみられた（鬼東 2021：101頁）。出島和蘭商館跡・唐人屋敷跡・桜町遺跡の

一部の出土品においては、このような傷は今のところ確認できていないが、ワインボトルの再利用・密封・開封などの状況に係る使用痕であると考えている。一点目との課題とも共通するが、より多くの出土品を調査し、同様の傷がみられないか再確認することと、ワインボトルの再利用に関する史料があるかを調査する必要がある。

近世日本における日蘭交流については、その史料の豊富さから主に文献史学の分野では多くの検証がなされてきた。考古学の分野においても、主に出島和蘭商館跡を中心として研究が行われてきたが、出土遺物の種類と量の膨大さから未だ出土遺物は整理段階にある。そのため、一つの遺物に焦点を絞って総括的に研究を行うことは難しい状況で、その中でもガラス瓶に焦点を当てた研究は未だ少ないといえる。今後も、近世日本社会において、ワインボトルなどのオランダ製品に代表される西洋文化がどのように受容されていたのかを、考古学的観点から明らかとしていきたい。

謝辞

本稿は、2021年度に西南学院大学大学院国際文化研究科に提出した修士論文の一部を、新たに追記・編集したものである。執筆にあたっては、指導教員である西南学院大学国際文化学部教授・伊藤慎二先生に、適切なお指導を賜ったほか、多くの方々にご協力をいただきました。

出島和蘭商館跡において出土するワインボトルとコンプラ瓶については、長崎市出島復元整備室・山口美由紀氏に資料調査のご協力とご教授を賜りました。

平戸和蘭商館跡におけるオランダ関係出土遺物については、長崎県世界遺産登録推進課・川口洋平氏にご教授を賜り、長崎市中のものについては、長崎市文化観光部文化財課・扇浦正義氏、竹村南洋氏に資料調査のご協力とご教授を賜りました。

ワインボトルの国内伝世品に関する調査では、神戸市立博物館・中山創太氏に、同博物館に所蔵され

ているワインボトル伝世品の資料調査にご協力いただき、ご教授を賜りました。また、ワインボトルの国内伝世品所蔵状況を調査するため、古河歴史博物館・永用俊彦氏、長崎市歴民俗資料館・永松実氏、長崎歴史文化博物館、松浦史料博物館・久家孝史氏にご協力をいただきました。

最後に、本稿における挿図として、神戸市立博物館、西南学院大学博物館、長崎歴史文化博物館に所蔵資料の画像提供をいただきました。

以上の方々へ、ここに深謝の意を表します。

参考文献

- 植松有希・印田由貴子編 2017『長崎版画と異国の面影』板橋区立美術館・読売新聞社・美術館連絡協議会
- 江後迪子編 2011『長崎奉行のお献立：南蛮食べもの百科』吉川弘文館
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 扇浦正義編 1989『北山伏町遺跡：新宿区立特別養護老人ホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書』新宿区北山伏町遺跡調査会
- 扇浦正義編 2000『桜町遺跡：サンガーデン桜町マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市埋蔵文化財調査協議会
- 扇浦正義 2002『長崎出島と旧市街地出土のオランダ貿易遺物』小林克編『掘り出された都市一日蘭出土資料の比較から一』81～107頁、日外アソシエーツ株式会社
- 扇浦正義編 2018『桜町遺跡：長崎市桜町8番26・27における埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市教育委員会
- 扇浦正義編 2020『唐人屋敷跡：長崎市館内町道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市教育委員会
- 岡泰正 2008『出島出土のガラス資料について カピタン部屋、拝礼筆者蘭人部屋、乙名部屋、三番蔵出土のガラス資料』山口美由紀・豊田亜貴子編『国指定史跡 出島和蘭商館跡：カピタン部屋跡他西側建造物群発掘調査報告書』第2分冊、42～54頁、長崎市教育委員会
- 岡泰正 2018『出島出土のガラス器について』山口美由紀・田中亚貴子編『国指定史跡 出島和蘭商館跡：銅蔵跡他中央部発掘調査報告書』76～85頁、長崎市教育委員会
- 岡泰正 2019a『ガラス製品』山口美由紀ほか編『出島和蘭商館跡：中島川河川改修事業に伴う発掘調査報告書』154～156頁、長崎市教育委員会
- 岡泰正 2019b『出島和蘭商館跡 江戸町側出土の西洋陶器及びガラス器について』山口美由紀ほか編『国指定史跡 出島和蘭商館跡：中島川河川改修事業に伴う発掘調査報告書』59～86頁、長崎市教育委員会
- 織田毅 2021『長崎のオランダ通詞たち：西洋と日本のはざままで』大分県立先哲史料館編『史料館研究紀要』第26号、1～11頁、大分県立先哲史料館
- 鬼東芽依 2021『西南学院大学博物館蔵 オランダ製「ワインボトル」』西南学院大学博物館編『西南学院大学博物館研究紀要』第9号、101～113頁、西南学院大学博物館
- 片桐一男 2019『鷹見泉石：開国を見通した蘭学家老』中央公論新社
- 川口洋平編 2005『長崎奉行所（立山役所）跡・岩原日付屋敷跡・炬粕町遺跡』長崎県文化財調査報告書第183集、長崎県教育委員会
- 川口洋平 2007『世界航路へ誘う港市・長崎・平戸』新泉社

- 川口洋平ほか編 2007『万才町遺跡Ⅱ：県庁新別館増築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第192集、長崎県教育委員会
- 神戸市立博物館編 1998『阿蘭陀絵伊万里とびいどろ・ぎやまん展—江戸のオランダ趣味—』福山市立福山城博物館
- 神戸市立博物館編 2011『和ガラスの神髄 びいどろ史料庫名品選』神戸市立博物館
- 古河歴史博物館編 2001『鷹見泉石日記』第二巻、吉川弘文館
- 古河歴史博物館編 2003『鷹見泉石日記』第六巻、吉川弘文館
- 国立科学博物館・読売新聞社編 2015『ワイン展—ぶどうから生まれた奇跡—』読売新聞社
- 小林克編 1987『真砂遺跡』真砂遺跡調査会
- 小林克 2001『ガラス器』江戸遺跡研究会編『図説 江戸考古学研究事典』267～268頁、柏書房
- 小林克 2021『近世物質文化の考古学的研究：民具資料との対比から日蘭物質文化比較へ』六一書房
- 小林裕ほか編 1991『真砂遺跡：第2地点：文京ふるさと歴史館建設工事に伴う発掘調査報告書』文京区遺跡調査会
- 桜井準也 2019『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房
- フィッセル著、庄司三男・沼田次郎訳 1978『日本風俗備考』2、平凡社
- 新宿区厚生部遺跡調査会編 1992『細工町遺跡：(仮称)新宿区細工町高齢者在宅サービスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書』新宿区厚生部遺跡調査会
- 新宿区内藤町遺跡調査会編 1992『内藤町遺跡：放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』第Ⅱ分冊遺物編、東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会
- 杉本つとむ解説・注 1972『紅毛雑話・蘭説弁惑』八坂書房
- 高田美由紀編 1999『桜町遺跡：医院併用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 高田美由紀編 2002『国指定史跡 出島阿蘭陀商館跡：道路・カピタン別荘発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 高田美由紀・古賀朋緒編 2000『国指定史跡 出島和蘭商館跡：西側建造物群復元に伴う発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 高田美由紀・古賀朋緒編 2001『国指定史跡 出島和蘭商館跡：護岸石垣復元事業に伴う発掘調査及び工事報告書』長崎県教育委員会
- 高田美由紀・下田幹子編 2003『国指定史跡 出島和蘭商館跡：南側・西側護岸石垣確認調査報告書』長崎県教育委員会
- 高橋紀子・美濃部達也編 2001『内藤町遺跡Ⅲ：新宿御苑食堂棟その他建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』国土交通省関東地方整備局・財団法人新宿区生涯学習財団
- 田中亜貴子ほか 2019『近世長崎市中におけるガラス関連遺物について』長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター編『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号、60～82頁、長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター
- 塚原晃 2021『放蕩息子の散財—長崎版画「阿蘭陀人康楽之図」とイギリス製銅版画』第74回美術史学会全国大会発表要旨
- 東京都江戸東京博物館編 1996『掘り出された都市：江戸・長崎・阿姆斯特ダム・ロンドン・ニューヨーク』東京都・東京都歴史文化財団・東京都教育文化財団・朝日新聞社
- 東京都新宿区教育委員会編 1988『三栄町遺跡』東京都新宿区教育委員会
- 長崎県教育委員会編 1986『国指定史跡 出島和蘭商館跡範囲確認調査報告書』長崎県教育委員会
- 長崎市史編さん委員会編 2012『新長崎市史』第二巻近世編、ぎょうせい
- 永積洋子 1979『オランダ商館の協荷貿易について—商館長メイランの設立した個人貿易協会(1826-1830年)—』日本歴史学会編『日本歴史』第379号、55～90頁、吉川弘文館
- 永松実 1993『発掘された食文化の洋風化について』箭内健次『長崎出島の食文化』143～168頁、親和銀行
- 永松実編 1993『栄町遺跡：ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市埋蔵文化財調査協議会
- 西近畿文化財調査研究所編 1998『播州葡萄園 園舎遺跡発掘調査報告書』稲美町教育委員会・西近畿文化財調査研究所
- 芳賀徹・太田理恵子校注 1986『江漢西遊日記』東洋文庫461、平凡社
- 萩原博文 2003『平戸オランダ商館 日蘭・今も続く小さな交流の物語』長崎新聞社
- 橋本孝ほか編 2001『国指定史跡 出島和蘭商館跡：護岸石垣復元事業に伴う発掘調査及び工事報告書』長崎市教育委員会
- 古門雅高・川口洋平編 2005『出島：一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う緊急調査報告書』長崎県文化財調査報告書第184集、長崎県教育委員会
- 町田利幸・前田加美編 2014『国指定史跡 出島和蘭商館跡：一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第11集、長崎県埋蔵文化財センター
- 間庭辰蔵 1976『南蛮酒伝来史』柴田書店
- 宮崎貴夫・寺田正剛編 1995『万才町遺跡 長崎県庁新別館建替に伴う発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第123集、長崎県教育委員会
- 宗政五十緒編 2000『上方風俗 大阪の名所図会を読む』東京堂出版
- 宮下雅史編 2008『桜町遺跡：長崎市桜町8番24号における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市埋蔵文化財調査協議会
- 宮下雅史編 2019『桜町遺跡：長崎市桜町4番11における埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市教育委員会
- 安高啓明 2019『長崎出島事典』柘風舎
- 山口美由紀 2008『長崎出島』日本の遺跡28、同成社
- 山口美由紀・豊田亜貴子編 2008『国指定史跡 出島和蘭商館跡：カピタン部屋跡他西側建造物群発掘調査報告書』第1分冊・第2分冊、長崎県教育委員会
- 山口美由紀ほか編 2010『国指定史跡 出島和蘭商館跡：南側護岸石垣発掘調査・修復元工事報告書』第2分冊、長崎県教育委員会
- 山口美由紀・田中亚貴子編 2018a『国指定史跡 出島和蘭商館跡：銅蔵跡他中央部発掘調査報告書』第1分冊、長崎県教育委員会
- 山口美由紀・田中亚貴子編 2018b『国指定史跡 出島和蘭商館跡：銅蔵跡他中央部発掘調査報告書』第2分冊、長崎県教育委員会
- 山口美由紀ほか編 2019『国指定史跡 出島和蘭商館跡：中島川河川改修事業に伴う発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 山口美由紀・田中亚貴子編 2019『国指定史跡 出島和蘭商館跡：出島表門橋架橋に伴う発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 山本孝造 1990『びんの話』日本能率協会
- 由水常雄 1983『ガラスの話』新潮社
- 渡辺宗男・天野八郎 1975『びんガラス』作花済夫ほか編『ガラスハンドブック』543-545頁、朝倉書店
- Clarke, Oz 2015 *The History of Wine in 100 Bottles: From Bacchus to Bordeaux and Beyond*, Pavilion Books, UK.
- Gawronski, Jerzy 2018 *Spul: catalogus archeologische vondsten Noord / Zuidlijn Amsterdam, Harmonie Uitgeverij de, Amsterdam.* <Kindle版>
- Šimkutė, Indrė 2011 *Glass bottles from the 16th century to the 19th century in the Old Town of Klaipėda: data from archaeological excavations*, Archaeologia Baltica. 2011, t. 16, p. 152-167, VI.
- Van den Bossche, Willy 2001 *ANTIQUÉ GLASS BOTTLES Their History and Evolution (1500-1850)*, Antique Collectors Club Ltd, UK.
- Wicks, John 1999 *17th and 18th Century Bottle Seals Excavated at Ferryland, NL, 1997-2022* Newfoundland and Labrador Heritage Web Site. <<https://www.heritage.nf.ca/articles/exploration/bottle-seals-introduction.php>, 2022年1月11日版>

図版出典

- 図4-1 長崎市教育委員会編 1986：89頁Fig. 39-3
図4-2 長崎市教育委員会編 1986：89頁Fig. 39-6
図4-3 長崎市教育委員会編 1986：89頁Fig. 39-7
図4-4 長崎市教育委員会編 1986：89頁Fig. 39-8
図4-5 長崎市教育委員会編 1986：89頁Fig. 39-9
図4-6 岡 2008：51頁45
図4-7 岡 2008：51頁46
図4-8 岡 2018：82頁3
図4-9 岡 2018：82頁4
図4-10 川口編 2005：96頁第75図118
図4-11 川口編 2005：96頁第75図119
図4-12 川口編 2005：96頁第75図120
図4-13 川口編 2005：96頁第75図121
図4-14 川口編 2005：96頁第75図122
図4-15 川口編 2005：96頁第75図123
図4-16 川口編 2005：96頁第75図124
図4-17 川口編 2005：96頁第75図125
図4-18 川口編 2005：96頁第75図126
図4-19 川口編 2005：96頁第75図127
図4-20 川口編 2005：96頁第75図128
図4-21 扇浦編 2000：72頁第32図7
図4-22 扇浦編 2000：72頁第32図8
図4-23 扇浦編 2000：72頁第32図9
図4-24 宮下編 2008：33頁第30図1
図4-25 宮下編 2019：35頁第30図2
図4-26 宮崎・寺田編 1995：151頁第118図18
図4-27 永松編 1993：68頁第50図8
図4-28 永松編 1993：68頁第50図9
図4-29 扇浦編 2020：75頁第3図7
図4-30 小林編 1987：334頁31
図4-31 小林編 1987：334頁32
図4-32 小林ほか編 1991：145頁第78図12
図4-33 東京都新宿区教育委員会編 1988：207頁第139図28
図4-34 新宿区厚生部遺跡調査会編 1992：66頁第57図6

註

- (1)同形状のワインボトルは、報告書によって「フラスコ型」「たまねぎ（玉葱）形」と表記されている例もあるが、本稿では日本国内でワインボトルが最も多く出土する出島和蘭商館跡の最新の発掘調査報告書（山口・田中編 2018b、山口ほか編 2019）の表記に倣い「フラスコ形」とする。
- (2)丸い形をした、個人・居酒屋・商人・ワイン醸造業者・製造業者・日付などの識別マークを刻印した部分のことを指す。通常、溶けたガラスの球を瓶の肩部に押しつけて成形される（Wicks 1999）。
- (3)平戸和蘭商館跡の報告書は、以下のものを参照した。
平戸市教育委員会編 1988『平戸和蘭商館跡：現状変更（家屋改築）に伴う発掘調査の報告』平戸市の文化財25、平戸市教育委員会
平戸市教育委員会編 1989『史跡和蘭商館跡Ⅱ』平戸市の文化財29、平戸市教育委員会
平戸市教育委員会編 1992『平戸和蘭商館跡の発掘・鄭成功住居跡の発掘』平戸市の文化財34、平戸市教育委員会

- 平戸市教育委員会編 1993『平戸和蘭商館跡の発掘Ⅳ/馬込遺跡の発掘Ⅰ/坊主畑第3遺跡の発掘』平戸市の文化財35、平戸市教育委員会
平戸市教育委員会編 1994『中野窯跡の発掘/平戸和蘭商館跡の発掘Ⅴ/馬込遺跡の発掘Ⅲ』平戸市の文化財38、平戸市教育委員会
平戸市教育委員会編 1996『平戸和蘭商館跡Ⅵ/大浜遺跡/浦小川遺跡』平戸市の文化財40、平戸市教育委員会
平戸市教育委員会 1999『1639年築造倉庫の基礎遺構』平戸市の文化財45、史跡平戸和蘭商館跡の発掘調査7、平戸市教育委員会
平戸市教育委員会編 2003『1639年・1637年築造倉庫の発掘』平戸市の文化財、史跡平戸和蘭商館跡の発掘調査8、平戸市教育委員会
平戸市教育委員会編 2005『史跡平戸和蘭商館跡の発掘調査Ⅸ』平戸市の文化財53、平戸市教育委員会
平戸市教育委員会編 2008『史跡平戸和蘭商館跡11』平戸市の文化財60、平戸市教育委員会
平戸市教育委員会編 2009『平戸和蘭商館跡の発掘調査12』平戸市の文化財63、平戸市教育委員会
平戸市教育委員会編 2010『史跡平戸和蘭商館跡の発掘調査13』平戸市の文化財65、平戸市教育委員会
- (4)フラスコ形ワインボトルの舶載は、遡っても17世紀後半からであると考えられており、平戸和蘭商館ではフラスコ形ワインボトルが持ち込まれていた可能性は低いとされる（長崎県世界遺産登録推進課・川口洋平氏私信による）。
- (5)壁面に水を通さないアマカワという粘土を塗り固めた遺構。人工池（貯水池）だと考えられている（出島展示解説による）。
- (6)江戸時代に、武士が拝領した屋敷の一部を分割して（切坪）、相対で交換すること。（きりつば【切坪】：国史大辞典，JapanKnowledge，<https://japanknowledge.com>，<2022年12月24日版>）。
- (7)江戸時代、武家屋敷の一つで、幕府から給与された屋敷。（日本国語大辞典，JapanKnowledge，<https://japanknowledge.com>，<2022年1月6日版>）。
- (8)地下室は、大名屋敷や旗本・町人の屋敷などを中心に作られた地下式の倉庫で、貯蔵施設や趣室などに使用されていたと考えられており、主に建物空間の外で検出される。本来の役割の後、ゴミ穴として転用される場合が多い（江戸遺跡研究会編 2001：116～122頁）。
- (9)2021（令和3）年度の美術史学会全国大会で、塚原晃氏により、イギリス製の銅版画をモチーフにして描かれた作品であることが指摘されている（塚原 2021）。
- (10)日記の原本の名称は一定していないため、総称して『泉石日記』と呼ぶ（片桐 2019：14頁）。本稿では参考とした古河歴史博物館による翻刻本（古河歴史博物館編 2001・2003）に倣い、『鷹見泉石日記』とする。
- (11)古河歴史博物館の永用俊彦氏より「鷹見家資料には数点の切り子瓶が伝存しているが、いわゆる「ふらすこ」というものは存在していない」とのご教示をいただいた。
- (12)ギヤマンとは、切子のそれに相似するところから蘭語のdiamant（ダイヤモンド、英語のdiamondにあたる）から転化したガラスの呼称のこと（日本国語大辞典，JapanKnowledge，<https://japanknowledge.com>，<2022年1月6日版>）。
- (13)吹きガラスの成形過程で、器の形を整える際に吹き竿からポンテ竿という竿に付け替える。ポンテ竿は容器の底部中央に付けられるため、ポンテ竿と器を切り離した際に底部中央に丸い跡ができる。この跡のことをポンテ跡という。